
Acoustic Bleach

切香

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

A c o u s t i c B l e a c h

【Nコード】

N 6 6 2 5 D

【作者名】

切香

【あらすじ】

B L E A C H 二次小説の短編集を置いています。7〜10話以外は一話完結なので、好きな題名のをどうぞ。

01：遠ざかっていく背中 「難森↓日番谷」(前書き)

ひとやすみ様(<http://cherry.fem.jp/onetime/>)よりお題をお借りしました。

01↓10話「ちよっぴり切ない10のお題」

01：遠ざかっていく背中

02：近いのに遠い

03：一人で見る夕焼け

04：ふとした瞬間

05：触れたい手

06：放された体温

07：振り返っても…

08：知らない期間

09：初めて見た表情

10：破られた約束

01：遠ざかっていく背中 「難森↓日番谷」

虚を追ってあたしの先に立つ、その背中に、隊首羽織の「十」の字が翻る。

走っても、走っても、追いつけないことにビックリした。

鬼ごっこして、いつまでもあたしに追いつけなくて、わざとスピードを落したら、ものすごく傷ついた顔をされたっけ。あれは、それほど昔のことじゃないはずなのに。

おかしいな。

あたし、こんなに遅かったっけ。日番谷くんが速いの？

その背中は相変わらず小さくって、あの頃と全然かわらないのに。

「難・・・」

日番谷くんが、振り返る。その目が、見開かれる。

「きゃあっ!!」

足が、地面の木の根っこにあたって、全身が前につんのめる。ありえない失態。景色がぐるんと回った。

日番谷くんを負われた帰り道。

その肩に手をかけて、背中を見下ろす。

ああ。

大きく、なったんだね。

いっぱい勉強して、いっぱい修行して、食べて眠って。

あたしの、知らないところでね。

あたしはただ、シロちゃんのお姉さんでいたかったんだと思う。だから、隊長になっても、一度も隊長と呼ばなかった。

認めたくなかったんだ。寂しかったただけなんだ。

あなたの背中が、とつくにもう遠ざかってしまっていたことに。

日番谷くんがあたしをいつも追っていた、戻らない日々にとつと、妬いた。

その背中の「十」、十字架に似てるね。

あたしから離れても、変わらず幸せになってね。

こっそり、そう祈った。

02：近いのに遠い 「日番谷↓雛森」

スマキにされて川に放り込まれる夢を見た。

ハッ、として暗闇の中で目を見開くと、俺の胴に腕を回して、万力のような力で締め付けている女の影に気がつく。

締め付け感の正体はコイツか。

「雛森？おい、雛森っ！」

呼びかけるが、アイツはスウスウと平和そうな寝息を漏らすだけで、全く目を覚まさない。頬に浮かんだのは、かすかな笑み。

一体、どんな夢を見てるんだか。

俺は、そつと雛森の腕を外し、布団から抜け出した。

障子を開けて土間に下りると、湯飲みに水を汲んで、一気にあおつた。

粗末な格子窓からは、白く澄んだ月が見えた。

ポチャン、ポチャン、と蛇口から静かに落ちる水滴の音と、

雛森の寝息が、暗い夜の空気の中で、シーソーのように定期的に引き合っている。

雛森が、この潤林安の家に戻ってくる回数は、少しだけ減った。

目標があるんだと、笑顔で言ってた。

それは、目標という言葉に名を借りた、憧れだっことを俺は知ってる。

何か気に食わないって気分にはなる。

でも、それにしてもアイツは、その男の話をするとき、なんて嬉しそうに笑うんだ？

それはもう、呆れてしまうほど。
つられて、笑ってしまうほど。

なんだか平和な気分になってしまった自分を、後でバカにすること
がある。

そして思うんだ。

男だから、女だからなんてつまらねえことを言う気はねえ。
でも俺は、お前にだけは負けたくないんだ。

「シロちゃんは、あたしがいないとダメなんだねえ」
そんなこと、二度といわせたくねえと思うんだ。

雛森が、俺のことを弟みたいに思ってることは知ってる。
でも、俺は弟なんて呼ばれたくねえ。
少なくとも、お前と対等でいたいんだ。

でも何でだろう、対等になったと思うほど、お前が遠ざかっていく
ように思えるのは？

03：一人で見る夕焼け 「ルキア↓織姫」

夕焼けの光が、河川敷にさあつと差し込んでいた。
わたしは河川敷の上の歩行者道路を、ぶらぶらと、あてもなく歩いていた。

河川敷は決して広いほうではないが、暖かな日差しの名残を楽しむ者たちでにぎわっていた。

口の周りに白い毛が目立ちだした犬と、ゆっくりと散歩する老人。
川の近くに座って、草むらに隠れるように、バイオリンを弾く若者
バドミントンの羽をうちあい、歓声をあげる数人の子供たち。

マクドナルドの袋に手をつ込み、なにやら笑顔で話している男女。
バサササ・・・

音を立て、鳩が2人の足もとから一斉に飛び立った。

夕暮れのあたたかな光が、彼らも、景色も、わたしさえも、包んでゆく。

光の中、向こうから歩いてくる女子高校生たちの姿をみつけ、私の足は一瞬止まりそうになった。

膝よりも少し上のスカートがそろって軽やかに揺れ、
笑いさざめいている彼女たちの気分を表しているようで、いかにも
愉しそうだ。

ベージュのプリーツスカート。赤いネクタイに、白いブラウス。
空座高校の制服だった。

腰までまっすぐに伸びた黒髪の少女と、茶色の短めの髪の、背の低い少女。

2人とも、井上の同級生。

かつて、わたしがあの高校で生徒を装っていたときのクラスメート

でもある。

わたしがソウル・ソサエティに戻った時点で、彼女らからわたしの記憶は削除されている。

まるでビリヤードの玉のように。

一瞬交差したわたしたちは、すぐに逆方向へと跳ね飛ばされた。

後悔、はしない。寂しい、とも思わない。

でも、その距離の遠さを、ふと思った。

目を伏せて、笑いさざめく2人の隣を通り過ぎる。

ふわり、と髪から、やさしい香りが届いた。

シャンプーの匂いと、土手の匂い、そして太陽の匂いが混ざり合った香り。

ふっ、と足が止まった。

・・・ふたりの笑い声の間に、わたしの笑い声が、まざった気がして。

もちろん、そんな訳はない。

それでも半ば無意識に振り返って・・・わたしは言葉を失った。

ふたりの間に、まるで違和感なく、本当に人間の子供のように、笑っているわたしが見えた気がした。

それは、ほんの一瞬。

—— そうだ・・・

わたしにも、現世で生きていた時代がある。

150年以上昔のことになるが。

やはり、こんな風に、友達と笑いながら歩いたこともあっただろう。わたしは、全く覚えていないけれど。

「それでね・・・」

「あはは、ほんとに？」

気づけば、ふたりはわたしに背を向けて、笑いながら遠ざかっていった。

わたしは、中途半端な体勢で振り返ったまま、ふたりを見送った。

気づけば、夕闇は少しずつ濃くなっている。

いつもより深い色に見えるブルーのワンピースが、冷たくなった風に揺れた。

何を、やっているのだ、わたしは。

ふう。ひとりため息をついた。

「朽木さーん！！」

その時、河川敷全体に響き渡った声は、わたしだけでなく、その場の全員を振り向かせた。

「まってて！」

栗色の長い髪をなびかせ、土手の向こうの道から駆けてくるのは、見慣れた姿。

顔いっぱい満面の笑みを浮かべて、わたしに向かって大きく手を振っている。

大きく、胸の中にあたたかな気持ちがあふくらんだ。

「おう、井上！！」

そしてわたしは、茜色の中で大きく手を振った。

04：ふとした瞬間 「織姫↓ルキア」

それは、ふとした瞬間。

こみあげてくる感情がある。

ガタンゴトン、と電車が通り過ぎる。

駅前では、次々と吐き出される人たちに、せつせとティッシュを配る人たち。

携帯売り場の前では、すらりとした足の女の子たちが声を張り上げる。

そこをすり抜けるあたしの足音も、こんな喧騒じゃ聞こえない。

今日はよくやったわ、てあたしは思う。

テストの点数は友達の中で一番上だったし。

体育のバレーボールはうまく動けなかったけど・・・でも、みんなドジなあたしを見て笑ってくれたから、楽しかった。

英語の授業中も、ヤマ張ってきたところがばっちり当てられて、ちよつとあがったけど、ちゃんと答えられたし。

下校するときに・・・教室から出ようとする黒崎くんに、ちゃんと「また明日」って、言えたから。だから、今日はいい日。

「ご褒美あげちゃおっかなー！」

あげちゃうのは、もちろん頑張ったあたし自身に。

あんまり高いものは買えないから、1000円くらいのアクセサリとか。

ちよつと奮発したスイーツとか。ちよつぴりシアワセになれる何かを。

そつ、自分にご褒美をあげなきゃ。

毎日、毎日。学校が鉄格子がない牢屋みたいだったときのことを思い出す。

髪の毛が明るすぎる、生意気だつて言つて髪を切られて。

授業中も、みんながそれを知つてて、冷たい目で見てるみたいな気がして、

休み時間が一番辛くて、机に突つ伏してたつて。

あの時に比べたら、ちゃんとあたしはやれてる。

今週末はカラオケに行つて、おいしいもの食べて・・・

冬休みは、みんなで温泉に行こうつて話しもしてる。

立ち止まつてる時間なんてないんだ。

ふと。足が止まった。

3秒・・・5秒・・・周りの人が、どうしたんだつて顔であたしを見て通り過ぎてく。

中には、あからさまに怪訝な顔してる人もいる。

―― やだ。また来ちゃつた・・・

それは、おかしい感覚。

急に金縛りになつたみたいに体が止まつて。動かそうとすると、悲鳴を上げる。

―― 歩いて、どこに行こうつて言つたの？どんな意味があるのよ？

―― 毎日毎日、同じこと繰り返して。なんのためよ？

―― 結局あの時だつて今だつて、わたしは1人つきりじゃない。

頭の中に、いろんな声が混ざる。

我慢できない。しゃがみこみたい。そして大声を出して泣いてしまいたい。

あたしは、その正体何か、いつごろか気づいてた。

それは、「孤独」。

全ての楽しいこともやらなきゃいけないことも、全てどうでもよくなってしまうほどの、強い「孤独」。

必要なのは、かわいいアクセサリーじゃない。

おいしいケーキでも紅茶でもない。

誰かが笑顔を向けてくれればそれだけで、よっぽど効果があるのに。

「あたしは、孤独なんかじゃない・・・」

ちいさく呟いたその声が、本当に小さくて、あたしは自分でハツとした。

大人になれば、こんなどうしようもない気持ちからも、卒業できるのかな。

すう、と小さく息をつく。

そして、人の流れに合流するみたいに、もう一回歩き出す。

気がつけば、足は夕日が差し込む土手に向いてた。

ぱつと景色が開かれた、って思った瞬間、あたしは土手の道にたつ女の子を見つけた。

「朽木さん・・・」

中途半端に体を捻って振り返って、何をみてたんだろう。

その方向には、なにもないのに。

ちらり、と見えたその横顔に、あたしはドキリとする。

それが、びっくりするほど、あたしに似てたから。

すう、と今度は大きく息を吸い込んだ。

わかるよ、朽木さん。いま、何を考えてるか。

でもきつと、ひとりじゃないから。朽木さんも、そしてあたしも。

あたしは顔いっぱい笑顔をつくって、

「朽木さん！！」

大声で、呼びかけた。

05：触れたい手 「乱菊↓市丸」

あたしは今日も月を抱く。

白くて冷たくて、そばにあるのに近づけない月を。

朧月が静かに投げかける光に、あたしはふっと目を覚ました。

あたしの肩から背中にかけてまわされた右腕は、あたしの曲線に吸い付くようになじんでる。

決して太くはないくせに、まるでゆりかごみたいにガッチリとあたしを包み込む。

肩に頬を寄せたまま仰向くと、銀色にサラリと輝く髪が見えた。枕に散らされた銀色。

ピクリともしない閉ざされた双眸。

死んだみたいに、寝息も聞こえない。

それを見ていたら、なんだか急に、ものすごく寂しくなった。

2人でいるくせに、これほどの強い孤独を、あたしは1人のときに感じたことがない。

この男のせいだ。

あたしは衝動的に体を起こそうとした。

その時。

悪戯っぽく、その口角が上がるのをあたしは目の端に捕らえた。

「っ、ギン……！」

あたしの抗議よりも早く、その右腕に力が入って、あたしの体は軽々とギンの上に押し付けられる。

同時にまきつけられた左腕が、ぎゅうつ、とあたしを腕の中に閉じ込める。

「何を考えとるん」

笑みを含んだ低い声が、投げかけられる。

答えようにも、こんなに頬が胸に押し付けられた状態で喋れるわけがないじゃない。

「何も、考えんでええ」

その男にしては細くて長い指が、あたしの髪をいたずらに撫でてゆく。

あたしが、髪を撫でられるのが好きだって知ってるのは、この男だけ。

大人の女にしか見えないだろうあたしには、似合わないだろうけど。

気持ちぐゆっくりと溶けていく。ギンと交わってゆく。

あたしはふう、とため息をギンの胸に落す。

指先をそっと、ギンの裸の胸に触れさせる。

何を、想ってるの？

石みたいに止まっているのか、波打っているのか、それとも風いているのか。

あなたの音を聞かせて。

つ、と手のひらが胸に触れたとき。

いつの間にか伸びてきたギンの手が、あたしの手をつかまえた。空を切ったあたしの指先を、ギンがゆっくりと包み込む。

こんな近くにいても、あなたの心が見えない。

お願い、あなたに触れさせて。

06：放された体温 「市丸↓乱菊」

あいつの体温は、陽だまりによく似とる。
まるでお陽さま抱いとるみたいにな。

一年に一回、八月十五日。

この日だけ、精霊廷はソウル・ソサエティの人間にもその門戸を開く。

まあ、立ちいれるんは一区間だけやし、精霊廷の周りに住んどる奴等だけやけどな。

ボクは三番隊の二階、屋根裏部屋みたいな部屋の窓に腰掛けて、通りを見下ろしてた。

通りの両側には、射的、金魚すくい、ヨーヨー釣り、とうもろこし、カキ氷。

これでもかってゆう位、屋台が立ち並んでる。

屋台の周りには子供が群がって、大人は通りの真ん中に出された椅子に座って酒飲んどる。

夕日が沈もうとしてる通りを煌々と松明の灯りが照らす。

ボクのいる部屋の中にも、ちょっとだけその光がとどいた。
でも、部屋の奥のほうは、何があるんか分からんくらいの闇や。
ボクは窓枠に座ったまま、膝に置いた本をパラリ、とめくる。
字なんかほとんど見えん。読みにくいんやけど、ボクはこの空気が
気にいっとる。

埃っぽくて、薄暗くて、誰の目にも留まらん。

その時、通りからの声に、ボクは本から顔を上げる。

「うお、あの女見ろよ！」

「すつげえ美人」

言つとくが、女好きなわけやないからな？

まあ、つまらん本よりマシなんは認めるけど。

見下ろす先にいたんは、黄金色の波打つ髪が背中を覆った、すらりとした長身の女。

その白地の着物には、真紅の大輪の薔薇が咲いとる。

こんな派手派手しい着物があつさり似合つてしまふ女なんて、精霊廷探しても1人しかおらん。

細い、白い指が自分の髪を掻きあげる。

着物の柄に合わせた紅い爪がここからでも見える。

その香水が薰つたんが分かるような氣いさえするわ。

「バカ、ありや死神の中でも副隊長だぜ？松本乱菊！ヘタに手出したら殺されるぜ」

「ホントか？もつたいねえ・・・」

それを耳の端に効きながら、ボクの目は無意識に目の前にかざしてた右手に吸い寄せられた。

正確には、その人差し指の先へやけど。

この指がアイツに最後に触れたんは、どれくらい前やったやろ。

女に触れた余韻をひとりで思い出すほど、もてへん訳でもあるまいし。

未練なんか、アホらしい。

別にアイツは拒まんやろ。

でもボクは、もうアイツには触れんと決めとる。

でもまア、アイツとのそぞろ歩きも悪ないな。

ボクの視線の先で、乱菊は屋台の前で足をとめて、そのオッサンと何か話しとる。

よっこいしょと窓際から立ち上がったとき。

乱菊は振り向いて、ボクのほうに顔を向けた。
酒のせいか、頬が上気してて、見慣れたボクが見てもなんだか綺麗
や。

「たーいちよ！日番谷隊長！」

ピタリ、とボクは体の動きを止める。

「なんだよ？大声出すんじゃない」

ボクの視線の先で、人ごみをスイスイ避けて日番谷はんが現れた。
渋い緑の着流しを大人みたいにまとって、きゅっと黒い帯を締めと
る。

不思議やな、霊圧も消しとるしタダのガキに見えるやろに、やっぱ
りちよつと違うらしい。

回りは普通やないと分かって自然によけるんやろな。

こんな混雑でも全然他の奴に動きを邪魔されてへん。

「このカキ氷屋さん、氷切らしちゃったみたいなんですよ。出せま
す？」

乱菊の艶のある声は、こんな場所でもよう届く。

なるほど、周りにワラワラ群がった、もの欲しそうなガキらはそう
いう理由か。

「・・・俺がどんなに、仕事以外で氷出すのが嫌いなのかは知って
るよな??」

にべもなく日番谷はんは言い放つ。

確かに夏になるといつつも、十一番隊の草鹿やちるに追いかけまわ
されとる姿を見るからなア。

「そーんな冷たいこと言わないでくださいよ」

「やーいや！隊長様にそのようなことしていただくわけには・・・
結構ですのー！」

カキ氷屋のオッサンは、恐縮しまくって頭を何回も下げとる。

周りには、いきなり現れた隊長格ふたりに目をキラキラさせとる流

魂街の子供。

「あ、そっか、隊長刀もってないですもんね。刀がなければそもそも無理か」

乱菊は気を使ったような声を出す。あくまで「ような」や。

「ああ？」

「すいません、気が回らなくて」

わつざとらし・・・

ボクが突っ込みそうになったとき、

「バカ言っくんじゃねえ。出せるに決まってるだろ」

不機嫌そうに日番谷はんが言い返す。

なんや？乗ってやるんか。

「ホント？ホントに出せるの？？」

子供たちの歓声にチラリと目をやると、無言で屋台の台の上に手を出す。

手品みたいに、手の下に急に現れた氷に、見守るオッサンとガキらの口が、全く同じ形に開く。

「行くぞ松本」

日番谷はんは乱菊だけにそういうと、ざっと踵を返した。

「あ・・・ありがとうございます！」

「すげえ！」

オッサンと子供たちの声が、その背中にかけられる。

「はい！」

乱菊の張りのある声がそれに返す。ふふっ、と笑いながら日番谷はんの背中を追う。

それを見て、ボクは思う。

よかったな、て。

乱菊とボクと一緒に暮らしてたとき、ボクは乱菊が寝てる隙に、よく抜け出した。

決して、背中を追わせてやらなかった。

「行くで、乱菊」

そういつてやるには、ボクの行くところはいつも、乱菊にはもったいないような薄暗いところやったからな。

でもきつと、日番谷はんが連れて行ってくれるんは、そんなトコちやうで。

もつとまっとうで、もつと光に満ちたところのはずや。

だから、ボクはもう二度と、お前には触れん。

「ん？」

乱菊はその時、ふと笑顔を消して、日番谷はんを追う足を止めた。

「ギン？」

何やって？

ボクはその声に正直ビックリする。

霊圧を消しとるときボクは、誰にも見つからん自信あるのに。

気配感じとつとる訳じゃないらしくて、視線はボクからズレとるけど。

後ろを振り返る乱菊に気づいて、日番谷はんが足を止めて肩越しに乱菊を見やった。

「どうした？松本」

「ええ。ギンの声が聞こえたみたいない感じがしたんですけど、気のせいかな」

「アイツがこんな祭りに出てくるとは思えねえけど」

「意外と、屋台の食べ物とか好きなんですよ？後で持っていてやります」

ボクを探すのを諦めたらしい乱菊は、たたつと日番谷はんに走り寄った。

「あ！日番谷くん、乱菊さん！」

「やあ、お2人さん」

その時、ふたりにかけられた声、その気配に、ボクは目を見張る。ふたりに合流したのは藍染隊長はん、そして雛森ちゃん。

おーおー、穏やかに笑てはるなあ。

ボクに言わせれば、なんで周りの奴等はこんな風に笑う藍染はんの隣に平気でいられるんやろ。

あの人、まったく同じ笑顔で人も殺すで。

話しかける雛森ちゃんに何かを返ししながら、乱菊がもう一度振り返った。

今度は、まともにボクのほうを。

—— きづいとるんか・・・？

でも、乱菊から見たら、ボクのいる場所は真つ暗なはずや。

結局なにも見つけられなかったんやろ、乱菊の視線は空を切る。

ふう。ボクがため息付いた時。

後ろから声が聞こえた。

「何してる、こんなトコで」

驚かんかったって言ったら、ウソになる。

「いや、人間観察はボクの趣味やからな」

笑顔をつくって、ボクは振り返った。

「趣味悪いんじゃないのか」

暗い部屋の壁に背中をもたせかけ、腕を組んで立ってたんは、日番谷はん。

いつの間にここに来たんか、気配もまったくせんかった。

子供は隠れんぼが好きって言ってもこれは、いきすぎやろってからの抜き足や。

「行つてやれよ。松本が探してるぞ」

日番谷はんは、親指の先をくいつと外に向けた。

「アンタこそ、行つてやらんでええの？」

視線の先では、日番谷はんがいなくなつたことに気づいて、あちこち探してる3人の姿。

藍染はんの瞳が、ちらりとこっちに向けられた。

そして・・・冷酷な、といつてもいい視線が一瞬、こっちに投げつけられる。

その視線の先を追つて、ボクは続けようとした言葉を止めた。

藍染はんと日番谷はんの瞳が、斬れそうなくらい鋭く交差しあつたのが分かつたからや。

それは、ほんの刹那。

でも・・・同僚が交わすような表情やない。

ボクは、あらためて日番谷はんを見た。

「・・・市丸」

日番谷はんは、外に目を向けたまま言つた。

「なんや」

「ソウル・ソサエティを裏切つてもいい」

何を言つてるんや、コイツは？

偶然凶星に当たつたんか、確証があるんかは知らん。

でも・・・もし後者やつたら、これは流せんな。

ボクは、腰に差した斬魂刀を意識する。

日番谷はんは、ボクの殺気に気づいたんか、視線をボクにまっすぐに向けた。

「でも松本は裏切るな。殺すぞ」

本気、やな。

たった一人で、隙間風の差し込む小屋に取り残されて。

目が覚めてそれに気づいた子供の頃の乱菊は、一体どう思ってたんやろな。

聞いてみたことないけど、たまに、そう思うことあるわ。たった一人の一日を、どうやって過ごしてたんやろ。

憎んだんやろか。悲しんだんやろか。

そしてこれからボクがすることは・・・一日、どころやない。

日番谷はんとあって、信頼ってものを知った乱菊を、更に痛めつけるに違いない、裏切り。

「そんな時が来たら・・・遠慮なく、殺してくれてかまへんで」
なんでそんなことを口走ったんかは分からんけど、気づいたら口にしてた。

日番谷はんの睨がキュツとつりあがる。

その右手が、中空に上げられる。

斬魂刀もないくせに、やる気か？

ボクが腰の斬魂刀に視線を落したとき。

パキッ、と日番谷はんが指を鳴らした。

それと同時に、ボクの隣においてあった蜀台に小さな炎が灯る。

部屋の中が、一気に光に満たされた。

「あー！ギン！と、隊長・・・？」

乱菊の大声に、ボクらは視線を外に逸らした。

日番谷はんは、チラリとボクを見ると、ふっとその場から姿を消した。

次に現れたんは、雛森ちゃんの隣やった。

「もー、ギン！そんなとこにいたのね。早く来なさいよ！」

怒ったような乱菊の声を、ボクは懐かしく聞いた。

どんどん、遠くなる気がするわ。

ごめんな、乱菊。

でも、皮肉なことに。日番谷はんがいるなら、ボクは遠慮なくお前を裏切れる気がする。

07：振り返っても・・・「更木 やちる」

コン、と一度、襖が遠慮がちに叩かれ、更木はふつ、と目を開いた。縁側に続く、障子には明るい午後の日差しが注がれ、畳に透けている。

「隊長？」

聞こえるのは、斑目一角の声。寝起きの悪い自分を起こすのに、気を使っているのが丸分かりだ。

昼間っから寝ている隊長を起こすために、気を使う第三席。

考えてみるとひでえ話だ・・・と、寝ぼけているせいか珍しく殊勝に考える。

「おう・・・」

返事をして起き上がったとき。

ばしゃーんばしょーん

耳をつんざくような音に、更木は目を剥いた。

「剣ちゃーん、朝だよー起きて！」

「てめえ・・・シンバル打ち鳴らすんじゃねえ！」

更木はとつさに（とつさにこういう行動が出るのは問題だが）一足飛びに襖に近づくと、そのまま襖を蹴倒した。確かな手ごたえを、踏みつけた襖の下に感じる。

「てめえ、やちる！俺の安眠を・・・」

「きやははは！」

「ん？」

見れば、シンバルを手にしたまま、中庭を飛び跳ねてゆくやちるの

姿。

と、すれば、下にいるのは・・・

「てめえ、もう少し要領よくならねえか？」

「こ・・・心がけます」

更木は襖を持ち上げ、下敷きになっている一角を救い出した。

「で？何だよ」

「はあ」

一角は、さつき下敷きになった時にイカれたのだろっ、曲がった首を元に戻そうとしながら言った。

「コレなんですがね」

懷から、一枚の紙を取り出す。

「日番谷隊長が、更木隊長にコレをと。今月は一枚だけですな」

「面倒くせえな・・・」

吐き捨てながらも、畳に置かれた紙を広げ、墨書きしてある書状にチラリと目を通した。

通常だったらず間違いなく目も通さずに放り出す。

それをやらないのは、依頼主が十番隊隊長・日番谷冬獅郎だからだ。

日番谷が、十一番隊の業務の割り振りをするようになって、何年にもなる。

それまでは、十一番隊の滞納業務はほぼ全て、押し流し的に十番隊に行っていた。

ある日、マジギレした日番谷が十一番隊に乗り込み、おっとり刀で飛び出してきた更木と決闘すること丸三日。

流血、罵詈雑言、野次馬・・・そんなものが無駄に飛び交った後、日番谷が割り振る。十一番隊はそれをこなす、というルールが作られたのだった。

そうでなくても、十番隊には、草鹿やちるといふ小爆弾が年中炸裂している。

それを思うと、鬼の更木剣八と言えども、十番隊の依頼を無碍にはできないのだった。

「西流魂街55番。『猫目』^{ねこのめ}で、暴動が起きてるそうです。

まあ、この程度、隊長が行かなくても大丈夫ですが。

どうして日番谷隊長は、この仕事を更木隊長に振ってきたんでしょうね？」

何なら俺が、と一角が身を乗り出したが、更木は畳に胡坐をかいたまま、不機嫌そうに押し黙っている。

「オイ」

ぎろり、と更木は一角を睨む。

「なんで、日番谷は、俺が『猫目』に住んでたことを知ってる？」
「は？」

一角が、その吊り目を見開いて、更木を見た。

「『猫目』にコネがある俺なら、大した反抗無しに押さえ込めると踏んだんだろうよ。

だが誰が知らせた？」

更木が、人の口を気にするのは、極めて珍しい。

「やちるじゃないスか。最近もヒマになると十番隊に行ってるらしいスよ」

一角が答えると、ふうん、と更木は鼻を鳴らした。

それきり、関心がなくなつたかのように大欠伸をする。

「ま、ヒマつぶしに行ってみるさ。馴染みの顔もあるかもしれねえ」
そして、ごろりと無造作に転がしてあつた斬魂刀を手にして、立ち上がった。

やちるは、シンバルを朽木家の秘密基地に隠した後、弾むような足取りで、十一番隊に戻っていた。

春になり、寝てばかりの更木が起きている。これは滅多に無いチャンスだ。

「剣ちゃーん。どこかなー？」

蹴破られた襖から部屋の中を覗き込んだが、そこに更木の姿はない。「剣……」

部屋に足を踏み入れたとき、気配を感じた。

ふう。

同時に、ため息が聞こえる。

息の音でも、やちるにはそれが更木のものだと分かる。

縁側に立つ見慣れた人影に、パツと振り返ったとき……声が、聞こえた。

「やちる」

ぴたり、と、やちるはその場で動きを止めた。

飛びつこうとした中途半端な体制のまま、更木の表情をうかがおうとするが、この体勢では見えない。

「やちる」

もう一度、繰り返される。

それは、やちるが聞いたことが無いほど、小さく、かすれてさえいた。

少なくとも……「やちるを呼んでいるわけじゃない」。

やちるが唇を噛んだ瞬間、縁側から気配が、消えた。

慌ててやちるが縁側に出たとき、更木の姿は、もうどこにもなかった。

08：知らない期間 「更木 やちる」

日番谷冬獅郎は、途方にくれていた。

場所は、十番隊隊首室。

日番谷は、隊長用の執務机に座り、墨を含んだ筆を手に取ったところだった。

しかし、その墨は既に乾きかけている。

原因は、ひとつ。

日番谷の目の前、執務机の真ん中に、草鹿やちるが正座していた。日番谷がサインするはずの書類は、もちろん、やちるの足の下である。

—— 邪魔なんだよ、この野郎！

普段の彼なら、その一喝と共にやちるを追い払っているだろう。

しかし、それが出来ない理由は……

「う……ひつく……だからね、剣ちゃんが『やちる』って言ったんだよ」

シクシク泣き続けるやちるにあった。

—— 涙が落ちる！書類に落ちる！

チラリ、と下をうかがい、冷や汗を浮かべる日番谷。

コレを仕上げるのに1時間もかかった上、提出先は雀部だ。

あいつのチェックは、殊の外厳しいのだ。

総隊長が見る書類なのだから、仕方ないのだろうが……

字が滲んだり、汚れがつくだけで、相手が隊長だろうが、即「再提出」の印を押されるのである。

日番谷が困っている理由は、他にもあった。

やちるが何を言っているのか、サッパリ分からないのである。

更木がやちるを呼んだ。でも、やちるは呼ばれても行かなかった。

そして、更木は1人で行ってしまった。

当たり前ではないか。

「なんで、お前、名前を呼ばれて、更木に飛んでいかなかったんだよ？　いつつもそうだろう」

「だって、あたしのことじゃないもん」

日番谷は、やちるをどかすのを諦めて、筆を硯に戻した。

「じゃあ、何か？　他にも『やちる』て奴がいるのかよ」

予想に反して、やちるはコクンと頷いた。

そして、日番谷が置いたばかりの筆を取ると、慣らし用の紙を引き寄せ、ぎこちない筆を走らせた。

—— 八千流。
やちるめい

限りなく難読な、平たく言えばへたくそな字だが、そう読める。

「剣ちゃんの、特別なひとなの。『ただ1人、こうありたいと願う人』で。言ってた」

「そうなのか？」

日番谷は、思わず頓狂な声をあげた。

普通だったら、特別な人といえば、恋人とか家族とか、そういうのを指すだろう。

しかし、更木の「こうありたいと願う人……」

—— 殺人鬼……

絶対そいつは、更木よりも上の、殺人鬼に違いない。

「昔、剣ちゃん言ってたの。『八千流』って人に会ったのは、『猫目』だって」

ああ……

日番谷は、思わず頭を掻いた。俺か。俺の失策か。

更木が、猫目に昔住んでいたことがある、というネタは、山本総隊長から得たものだった。

何をどう思ったのか、護廷十三隊に入隊した更木は、初めに一番隊に配属されたという。

当時、死神学校・・・真央霊術院に入学したばかりだった日番谷にも、その噂は届いていたから知っている。

その時に、直々に更木を鍛えたのが、山本総隊長だったらしい。

——前に住んでいたことがあるなら、余計な血を流さないで済むかと思ったんだが・・・

『猫目』において発生した反乱軍が、中途半端な勢力だと聞いたからこそ、決めた人選だった。

更木の腕が昔から確かなら、おそらくその名を聞いた反乱軍は逃げ出すだろう。

更木も、自分より明らかに弱い人間に対しては、興味が無いのか剣を振るったりはしない。

でも・・・

「そこに、今も『八千流』って奴がいる可能性は？」

「わかんない。剣ちゃん、もうひとりの『八千流』のこと、しゃべらないもん。」

あたしの名前を、その人から取ったってことくらいしか・・・

物思いにふけりながら、筆を手慰みに走らせているやちるを見ながら、日番谷もまた、考えていた。

『猫目』で出会う更木と八千流。

飛び散る血痕、吹っ飛ぶ家々、壊滅する町。

「分かった。俺も行ってみる」

心の底からうんざりしながら、日番谷はため息混じりに言った。

もう更木が行ってしまった以上、今更止めるわけにはいかないし。もしも更木が本気で暴れたら、隊長でなければ絶対に止められない。

「ほんと？ ひつつん」

やちるが、涙に濡れた顔をあげて日番谷を見る。

「ああ。この書類一枚仕上げたら・・・ん？」

その途端、執務室に、日番谷の押し殺した悲鳴が木霊した。

「どうしたの？ ひつつん。大丈夫？」

「シメるぞてめえ！ 俺の渾身の書類に・・・書類に・・・」

汚れや染み一つでギヤーギヤーうるさい雀部が、書類の端に書かれたニコチャンマーク2つを許容する・・・とは思えなかった。

「1時間後に出る！ お前も来たけりや来い。」

ただし！ この1時間は、一步もこの部屋入るなよ！ 」

書類を右から左に書き写しながら、日番谷はチラリ、とニコチャンマークに視線を走らせる。

片方のニコチャンマークの頭には、ウニのようなトゲが11本、書かれている。

すぐ傍に、寄り添うように描かれたマークは、もう一つに比べると異常に小さい。

日番谷は、少しだけ手をとめ・・・かすかに、微笑んだ。

—— アイツも、やっぱり、女だな。

それは、ガキっぽくて、たわいもなくで、すぐに捨てられてしまうものだが・・・確かに、やちるから更木へのラブ・レター。

いくら大切な人だといっても、生まれてから死ぬまで一緒なんてことはありえない。

必ず、自分の知らない「空白」が存在する。

仕方が無いと分かっているけど、その空白に嫉妬したりするのだろうか、アイツも。

その空白に、更木の特別な人がいるとすれば、尚更。しかも、自分と同じ名前だ。

—— ん？同じ名前ってことは・・・

日番谷は、ある推論に達して、しばらく筆を止めたままだった。

09：初めて見た表情 「更木 やちる」

西流魂街第55番地区、『猫目』。

流魂街にはめずらしく、風光明媚な土地柄である。

町の中心部には蒼い湖があり、湖の北側には、湖を護るようになだらかな丘が広がっている。

その丘沿いに、白壁・臙脂色の瓦の家々が、ずらりと立ち並んでいた。

治安のいい地区からの旅行者も多い地だが、旅行者を狙った犯罪が多いのもこの地の特徴だった。

55番、という地区からも伺えるが、決して治安のいい地とは言いがたいのだった。

やちるは、楽しそうに鼻歌を歌いながら、細い通りを踊るような足取りで歩いてゆく。

やちるにとって、大きな湖など、これまで見たことがなかったから町を流れる水の流れ、町に並べられた色とりどりの魚、ひとつひとつ見入らずにいらなかった。

見慣れぬ子供が歩いていても、旅行者になれているこの町の人々は、特に奇異な目を向けたりはしない。

「どこかな、剣ちゃん・・・」

水槽で泳ぐ、赤色の魚に目を奪われながらも、やちるはポツンと呟いた。

日番谷は、やちるをここまで連れてくるが早いのか、

—— 「更木を探して来いよ。俺はこの辺で待ってる」

そういつて、湖畔に座り込んでしまったのだ。きつと今頃寝てる、とやちるは思う。

——でもあたし、ひとりじゃ剣ちゃんの気配わかんないよ。
やちるは、日番谷の背中にそう声をかけた。

いつも近くにすぎるせいで、自分の霊圧との区別がつかないのだ。

——大丈夫。あいつが暴れれば、イヤでも分かるから
日番谷は彼にしては間延びした声で、そういつていたが。

「ホントかな・・・剣ちゃん」

やちるは顔をあげて、丘の上のほうに向かって広がる、街並みを見上げた。

その時。

何の前触れもなく、町の一角が爆発した。

「ひええ！更木だ！更木剣八が戻ってきたぞ！」

「逃げる！とにかく逃げる！！」

「オイコラ、てめーら！人の顔見た途端逃げ出すんじゃないぞ！」

男達の悲鳴に混ざって聞こえてきたのは、聞き間違えようもない更木の声。

「きゃは！剣ちゃん見つけー！！」

やちるは、ぼん、とその場を蹴り、体重が無いかのような身軽な動作で、屋根の上へ飛び上がった。

パラパラと瓦のカケラや壁の塗料が撒き散らされる中、やちるは騒ぎの中心に向かって駆けた。

「とうちゃーく！」

タンツ、と下に降り立ち、やちるは満面の笑みで周囲を見渡した。

「あえ？」

右を見れば、そこには刀を抜き放った剣八の姿。

左を見れば、家の隅に追い詰められ、震え上がった男が数人。逃げ

遅れたのだろう。

「やちる？てめえ、方向音痴の癖に、なんでここまで・・・」

「ひつつんが連れてきてくれたの！」

「あのガキ・・・」

オイ、下がってる。こんなクソ面白くもねえ仕事、さっさと片付け・・・」

更木が、肩に担いだ刀をヒュン、と振り下ろしたときだった。

「オイコラ更木！このガキの命が惜しかったらな、刀を引いて出て行け！」

「お？」

更木のほうを向いていたやちるの首筋に、突然短刀が押し付けられた。

ぜえ、ぜえ、と荒い男の息が首筋にあたる。その手は、ガタガタと震えていた。

「あたしにそんなことしても、ダメだよ」

やちるは、男の顔を見上げて、首をかしげた。

外見は子供とはいえ、十一番隊の副隊長なのだ。

霊圧もない男が何人束になったところで、やちるの相手にはならない。

「黙れ黙れ！おとなしくしてろ！」

「剣ちゃん、あたし——」

ちよつとこのヒトなんとかするね。

そう言おうとしたやちるの声は、そこまで断ち切られた。

「やちるに触んじゃねえ！！」

怒号と同時に、一瞬のうちにやちる達の目の前に現れた更木が、男の腹を蹴飛ばしたからである。

男は声も上げずに吹っ飛び、背後の壁に大穴をあけ、家の外に転が

り出た。

スピードなら護廷十三隊の誰にも負けないはずのやちるが、目で追うのがやつとの速さだった。

「剣ちゃん！あたし大丈夫だよ！」

笑顔を浮かべて更木を見上げた・・・やちるの表情から、笑顔がスツと消えた。

更木の表情に、これほどの怒りが刻まれるのを、初めて見たからだ。

「剣、ちゃん」

やちるの、知らない表情。

それを目の当たりにして、やちるは一步、更木から下がった。

「ひい！」

男が空けた穴から、残党達が我先に走り去って行く。

わずから秒後には、周囲は静寂に包まれていた。

ふう。

更木は、ため息をつく、刀を鞘に納めた。

そして、大きな手のひらを、ぼん、とやちるの頭に置く。

置かれた手の指の間から、やちるは更木の表情を垣間見る。

置かれた手も、その表情も。十分すぎるほど、その意味を理解できなかったから。

「剣ちゃん、だいすき！」

やちるは、手をのけて歩き出した更木の肩に、満面の笑みで抱きついた。

10：破られた約束 「更木 やちる」

「オイ、クソガキ」

「クソガキじゃねえ、日番谷隊長だ」

棧橋の先にあつた小さな背中中は、振り向きもせずに返した。
裸足の白い足が、青い水を跳ね返す。

タタタ・・・とやちるが棧橋を走り、日番谷の横まで来ると、板を蹴った・・・湖に向かって。

「あたし泳ぐ！」

しかし、バシャーんと、やちるの体が水に落ちることは、なかった。

「おや？」

やちるが、素つ頓狂な声をあげた。

その体が、ゴムまりのように、水面で弾んだからである。

「こんな春に泳いだらカゼひくぜ。大体、何着て帰るつもりだ」

水面にぺったりと座り込んだやちるが、棧橋を見上げると、日番谷と目が合った。

「これもひつつんの力なの？」

「まーな」

「おもしろーい！」

たたた、とやちるが水面を駆けてゆく。

魚釣りをしていた人々が、ぽかーんと目を見開いてその様子を見つめていた。

「連れてきたなら、ちゃんと面倒みやがれ。こんなトコでボケツとしやがって」

棧橋を大股で歩み寄った更木が、日番谷から5メートルほどのとこ

るで、足を止めた。

「今さつきもあの野郎、アツサリ人質になりかけたぞ」

「どうせ、お前が護るだろうが」

日番谷は、肩越しに振り返る。

「じゃあ、そもそも何しに来たんだ」

「『八千流』」

日番谷のその言葉に、ピクン、と更木が肩を揺らせた。

日番谷を見つめる目に、怪訝そうな光が宿っている。

対照的に日番谷は更木から顔を逸らし、日光にまぶしく輝く湖面に視線を戻した。

「そいつとお前が結託したら、とんでもない大騒ぎになると思ったんだよ、一瞬だがな」

「・・・余計な世話だ」

「だろうな。そいつはもう、お前の手には届かない所にいる」

日番谷の声に、更木は何もこたえない。

もしも、「八千流」が更木と親交がまだあるなら、他の身近な誰かに、同じ名前をつけるのは考え辛いのだ。

「八千流」は、恐らく、もうソウル・ソサエティのどこにもいない。

「俺は、約束を破ったんだよ、アイツとの」
護れなかったのか。

その言葉が日番谷の胸に浮かんだが、言葉にはしない。

これは、更木の領域の話だ。自分が立ち入っていい話ではない。

それに気づいたから、この町にも一歩も足を踏み入れなかったのだ。

日番谷は、さつきから手の中で折っていた紙を、更木に向かって放った。

「ホンモノのガキかよ、てめーは」

更木は、それを見て、呆れたように言った。

更木に向かつて、スイツと滑らかな動きで跳んできたのは、紙飛行機。

伸ばした更木の手の中に、狙ったかのように飛び込んだ。

「てめ、これ山本のジーさんに出す書類じゃねえか」

「いいんだ、没だから」

広げたその紙を、更木はざっと見回して・・・ふと、一点に目を留めた。

それは、ヘタクソな2人の顔の絵。ヘタでも、この独特の髪型だけは、間違えようが無い。

「今度は護れよ」

それだけ言つと、日番谷は立ち上がった。

そのまま栈橋に背を向け、スタスタと町に向かつて帰ってゆく。

日番谷と更木の体が、狭い栈橋の上で、すれ違う。

「・・・護つて、やるよ」

特別だった者の約束さえ護れず、ただ生きていた自分に、もう一度目的をくれた子供。

二度と、同じことを繰り返しはしない。

「オイ！やちる！いつまで遊んでんだ、帰るぞ！」

「ハ―イ！」

天真爛漫なやちるの声が、湖を渡つて聞こえてくる。

ニツと笑つて、更木は日番谷の後を追った。

10：破られた約束 「更木 やちる」(後書き)

これで、やちる・更木編は終わります。

11～20は、劇場版BLEACH2がらみで更新予定。ネタバレ注意！

11：冷えた指先 「日番谷」(前書き)

劇場版BLEACH2 The Diamond dust Reborn
elion バージョン。

11話〜20話「冷たい10のお題」 ひとやすみ様より

01：冷えた指先

02：突き刺さる視線

03：感情の無い言葉

04：愛されない人

05：表情が無い

06：振り返りたくない過去

07：雪原の中

08：ベッドで一人

09：生活感の無い部屋

10：白い吐息

11：冷えた指先 「日番谷」

—— 「何だか、お人形さんみたいだね」

京楽がさりげなく漏らした言葉を、ふと思い出した。

銀色の髪、蒼碧の瞳、白い肌。おまけに氷のような無表情。
そんなのをひっくりくるめて言ってみたんだろうけど。
それは、俺を切れさせるに十分だった。

そんな、女みてえな言い方されて喜ぶ奴がいるか！

どう怒鳴ると、京楽と浮竹は、顔を見合わせて笑った。

—— 「ちよっと人間っぽくなった」

—— 「あ？」

俺が首を傾げると。浮竹は、微笑んで俺を見下ろした。

—— 「そんな毎日、根づめてやることない。

いざとなったら、俺達はいつでも君を助けられる。

十三人も隊長がいるんだ、支えあえばいい」

それは、隊長になったばかりで、何でもかんでも自分でやらなきゃ
と、気を張ってたところで。

その言葉のあたたかさが分かってても、受け入れることもできなかった。

「そんなこと・・・思い出すなんて」
俺は、苦笑した。

苦笑した傍から、腹の痛みで体がこわばった。

とっさに腹に手を持っていこうとしたが、思うように手が動かない。あまりの寒さに、手も足も、全く言うことを聞いてくれない。考えさえ凍結しそうだ。

このままでは、あと1時間もすれば俺は動けなくなるだろう。

一晚経てば、凍死。

「人形、な」

このままじゃ、本当に京楽の言葉の通りになってしまう。

—— 支えあえばいい。

そうだな、浮竹。

その言葉の意味が、今なら分かるけども。

でも、皮肉なことに・・・次に会ったら、もう俺達は敵同士、だ。

俺は、痛みを何とかやり過ぐすと、仰向いて、後ろの壁に体をもたせ掛けた。

崩れかけた神社の中。冷たく凍った月光じゃ、いくら灯りになっても、体を暖めはしない。

京楽の趣味は、月見だった。

今日も、変わらずこの月を見てるんだろうか。浮竹も、一緒かもしれない。

どれほど俺が馬鹿なことをしたのか、そんなことを語り合って、怒ってるかもしれない。

馬鹿だと、思う。

こんなことは間違っている、とも思う。

でも、正誤を言うのなら、初めから間違っていたのだ。

つまらない、理不尽な規則とやらに従って、草冠と俺が決闘を迫ら

れたこと。

そして、最終的には決闘さえもできず、俺との戦いで消耗した草冠は、隠密機動によってたかって、殺された。

「馬鹿野郎・・・」

当時の、まだ幼かった自分自身に、悪態をつく。

あの時、剣を取り、草冠を庇って戦おうとした俺の頭をよぎったのは、流魂街のばあちゃんや雛森の姿だった。

俺が死ねば、きっと泣く。

そうやって、俺は決定的なところで、他人を理由に使った。

それが、隊長になっても、ずっとずっと引きずり続けた、悔恨の理由だ。

だから。草冠と再び合間見たとき、俺は自分に問うた。

隊長としてではなく、ただ1人の男として、俺はなにを望むのかと。決着をつけたい、と俺からは即座に答えが返ってきた。

間違っただけでもいい。

誰にも、理解されなくてもいい。

それでも、やらなければならぬこともある、と俺は思う。

やり遂げた後、恐らく俺は、生きてはいないだろうけど。

「ぐっ・・・」

俺は、うめきながらも、氷輪丸を杖に、何とか身を起こした。

勝手に仲間を裏切っておいて、勝手に人を泣かせて、弱音を吐くなんて許されない。

決めた以上、こんなところで、立ち止まる訳にはいかない。

草冠を、探さなければ。

その時、懐がかすかに光っていることに、俺は気づいた。
寒さに震える手を懐に入れると、俺は伝令神機を引きずり出す。

—— 誰だ・・・

なんにしろ、電話に出るのはまずい。

場所を特定されるのがオチだ。

電源を切ろうとして・・・俺は、懲りずに光り続ける伝令神機を見下ろした。

どうして、その電話を取ったかは分からない。

しかし俺は、気がつけば、受話口を耳に押し当てていた。

電話の主は、しばらく無言だった。やがて、かすかに息が震える音の後、

「日番谷、くん」

聞こえてきた声に、俺は文字通り凍りついた。

—— 雛森・・・

昏睡状態から、覚めたのか。

目が覚めて、こんなことになってると知って・・・どう思ったんだろっ。

そう思えば、返す言葉なんて無い。

雛森は、明らかに涙に濡れた声で、続けた。

「戻ってきて」

俺は、ぐっと、唇をかみ締めた。

「戻って来れないなら、せめて、一緒に戦わせて」

俺は、ゆっくりと、伝令神機を耳から離れた。

手がかじかんで・・・巧く、ボタンを触れない。

その時。

神社の境内に満ちた気配に、俺はハッと顔を上げる。

—— 吉良。檜佐木・・・

「投降してください、日番谷隊長！貴方を処刑したくはありません！」

木霊したのは、檜佐木の声。

「日番谷くん！」

どくん、と胸が高鳴る。

ちょうど、釣り合いが取れたシーソーのように。俺の心は立ちすくむ。

「・・・っ」

自分の中で、勝負がつくのは、一瞬だった。

「待って、切らないで！！」

かすかに漏れた俺の吐息だけで、きつと、分かってしまったんだろう。

雛森の悲鳴のような声が聞こえた。

それを最後に・・・俺の冷え切った指先は、電源を切った。

「ごめんな、強くなれなくて」

本当に強い者とは、人を泣かせたり、苦しめたり、傷つけたりしない者を言うと思う。

でも、俺にはもう、他の道は選べない。

雛森なのか、草冠なのか、それとも、夢を持って死神になった幼い自分自身へか。

別れを告げると、俺は氷輪丸を手にしち上がった。

12：突き刺さる視線 「草冠」

俺は、細い路地を抜け、路地裏に置かれた箱をひっくり返し、逃げ続ける。

ぜえ、ぜえ、と息が弾む。

「おや、誰かね、今走っていったのは」

あの声は、俺を育ててくれた人だ。

でも、目を合わせたらいけない。姿を見られてもいけない。

俺が誰か知られたら・・・分かってしまうから。

俺がもう、一番ではなくなってしまったことに。

全ての人の目から逃れたはずなのに。

背中 of 辺りに、誰かの視線を感じて、俺は走り続けた。

「・・・草冠」

走って、走りぬいて、もう振り切っただろうと思い、俺は立ち止まる。

「おい、草冠！」

息を切らせて周囲を見回したが、大丈夫だ、誰もいない。

そう思ってホッと息をついた時・・・空に、蒼碧の瞳が、ぽっかりと浮かんでいるのに気づいた。

「起きろ、草冠！いつまで寝て・・・」

ハッ、と俺は目を見開いた。見慣れた茶色の天井。

そして、俺を至近距離から見下ろしていたのは――蒼碧の瞳。

それを視界に捕らえたと思った瞬間、俺はガバツと身を起こしていた。

「オイ・・・？」

少年の目が、驚愕に見開かれるよりも早く。

俺は、その襟元をガツと掴み、押し倒していた。

少年の華奢な背中が、後ろの柱にぶち当たって、止まった。
ハア、ゼエ、と弾む2人の息が、交差する。

「草冠・・・どうした」

それは、思いがけず静かな声。

その声に、俺の意識は一気に、夢から現実に取り戻された。

「冬獅郎・・・！」

顔を上げ、自分がまだ、冬獅郎の襟元をねじり上げ、押さえつけたままだということに気づく。

「す！すまない・・・！」

慌てて襟から手を放し、体を起こすのに手を貸してやる。

「びつくりしたぜ、いきなり掴みかかってくるから」

そう言っただけ俺を見上げてくる冬獅郎の瞳に、警戒の色は微塵も無い。

「本当にすまない。嫌な夢を、見ていたんだ」

そして、その蒼碧の瞳から、目を逸らした。

「気にしちゃいねえよ。お前は、トモダチだからな」

見上げると、冬獅郎は微笑んでいた。

「行こうぜ。試験が始まる」

真央霊術院も卒業前年ともなると、試験の回数が増える。

実際には、試験に名を借りた、護廷十三隊や隠密機動の青田買いだ。そこでいい成績を残せば、卒業を待たずして、護廷十三隊に配属になることも多い。

「見ろよ、山本総隊長までいるぜ」

冬獅郎は、チラリ、と目で修練場の向こうを示して見せた。

ちよつどの後の後ろにあたる場所だ。

そこに目をやると、確かに、白い髭を胸の辺りまで伸ばした老人が見えた。

その姿を見て、ぶる、と肩が震える。

他の生徒も似たり寄ったりで、死神勢の観客の多さに、固まっている者が多かった。

—— ここで、結果を出せば、死神になれる・・・！

横目で、隣に立つ冬獅郎を見下ろす。

長年ライバルと言われていたが、力の差が開いてきたこの少年に、追いつけるチャンス。

日番谷冬獅郎に会った時、初めは、懂れた。

「天才」と自分が言われるたび、違和感を感じた原因を見つけたと思った。

本物の天才は、ここにいる。そう思った。

そのときは、まだ知らなかったのだ。

天賦の才を持つものの近くにいる、恐ろしさを。

俺は、睨むように、修練場の先にある的を見やった。

結界によって護られた特殊な的だ。生半な攻撃ではビクともしない。

それを、どれだけ早く、どれだけ完璧に消し去ることができるか。

それによって、霊圧を測定するのだ。

護廷十三隊に入れる最低レベルで、十等霊威。

それを越えれば、護廷十三隊への道が開ける可能性があった。

「それでは、始める！一番手、天野佐助！」

「ハイ！」

張り詰めた声が、修練場内に跳ね返る。

50メートルほど先の的を狙う少年の手が、軽く震えているのを俺は捕らえた。

「君臨者よ、血肉の仮面・万象・羽搏き・ヒトの名を冠す者よ、焦熱と争乱、海隔て逆巻き南へと歩を進めよ・・・破道の三十一、赤火砲！！」

それは、一年目に習う、初歩中の初歩の鬼道。

しかし、ヘタに威力は強くても、難易度も高い技を使うよりは、確実かもしれない。

緊張しきっていた割に、その一撃は成功した、ように見えた。

でも・・・煙の奥から現れた的に、俺達は一様に、愕然とする。的には、傷一つついていなかったからだ。

「ペいっ！」

ざわめいた修練場内を静まり返らせたのは、山本総隊長の一言だった。

「甘い！全くもって甘いわい。今のだと、百等靈威くらいか？一年からやり直せ！」

バカな・・・

今の一撃は、真央靈術院の中では、「優」をつけられるべき一撃だ。全く、護廷十三隊は次元が違うとも言うのか？

その、俺の焦燥を裏付けるように、級友達が、次々と入隊には程遠い成績をつけられてゆく。

「なーんだ、興ざめだな、今年の学生は」

死神たちから、そんな声が聞こえ・・・俺は思わず、そちらに向かつて立ち上がった。

「草冠」

それを止めたのは、冬獅郎の一言だった。

「文句言ったところで、奴等は黙らねえよ。アイツらを黙らせられるのは・・・」

「十五番、草冠宗次郎！」

冬獅郎の声に、教官の声がかぶさった。

「分かってる」

俺は、冬獅郎に頷いて見せた。

ニヤリ、とこの期に及んで冬獅郎が笑うのを見て、啞然とする。こんな時なのに、全く動揺していない。

「大したヤツだよ、お前は」

それだけ言い残して、的の前へと足を運んだ。

授業でお前と組むようになって、恐怖を覚えるようになるまで、それほど時間はかからなかった。

すぐに、夢に見るようになった。お前が、どんどん遠くに行く夢。

どんな夢よりも、お前が遠くに行ってしまうことが、辛かった。

だから。しがみついても、俺はお前の隣を、他のヤツには譲らない。

このテストで、きつとお前は、護廷十三隊への入隊が決まるだろうと思う。

この一番は絶対に、落せない。

スッ、と翳した手の先に、山本総隊長の顔が見える。

もう見るものは無いとばかりに、間延びした顔をしている。

「血肉の仮面・万象・羽搏き・ヒトの名を冠す者よ・・・」

言いなれたフレーズを唱える。両手を、まっすぐに的に向けた。

「蒼火の壁に双蓮を刻む 大火の淵を遠天にて待つ・・・破道の六十三、双蓮蒼火墜！」

言い終わると同時に、蒼い炎が俺の両手から迸る。

それは、過たずに的に向かい・・・的のところで、炸裂した。

土煙が晴れた後を見た俺達は・・・同時に、歓声をあげる。
的には、破片に砕け散っていた。

「よくやったな、草冠」

小声で教官が言つと・・・声を張り上げた。

「草冠宗次郎、十等靈威！」

「入隊のボーダーに乗ったぞ！」

わあっ、と周囲が沸く。

「皆、静粛に！」

場内に、教官の声が響いた。

「十六番、日番谷冬獅郎！」

その瞬間。水を打ったような沈黙が、その場を覆った。
的の向こうで、山本総隊長が座りなおすのが見えた。

死神たちが、ざわざわ、と言葉を交わす音が聞こえる。

「あれが、化物って噂の新人だぜ」

「本当にガキだな・・・」

やってきたのは、背筋の毛が逆立つような、緊張感。

日番谷が立ち上がり、落ち着いた足取りで、的の前へと向かう。
その場に立ったとき、その場を大声が貫いた。

「おーい！冬獅郎！手こずるんじゃないわよ！」

「ちょ、ちよつと乱菊さん、試験中だよ・・・せつかく集中してるのに」

「この程度で弱まる集中力なんて、なくなっちゃえばいいのよ」

俺が見ると、金髪の長身の女と、黒髪で小柄な女が冬獅郎を見てた。

「松本・・・雛森」

冬獅郎の口から、2人の名が漏れる。

その名は、2人とも護廷十三隊の席官に違いなかった。

冬獅郎は、ふう、とため息を着いたらしかった。

そして、チラリ、と的に目を走らせる。

それは、耳を澄まさなければ聞き取れないほどの小声。

「雷吼炮」

その瞬間、あたりがまばゆい光に包まれた。

俺達は全員、耐え切れなくなって目を閉じる。

「・・・ふう」

一番初めに声を漏らしたのは、山本総隊長だった。

「やれやれ、せっかく伸ばしておったのに。髭が焦げてしまったわ」

「的は！」

俺は、慌てて身を乗り出して・・・きよろきよると、辺りを見回した。

「的なら、消し飛んだ」

いつの間にか、学生達の列に戻ってきていた冬獅郎が、サラリと言った。

詠唱破棄して尚、この威力。

俺達が固唾を呑んで見守る中、教官は顔を紅潮させ、叫ぶように言った。

「日番谷冬獅郎、三等靈威！」

あたりが、歓声に包まれる。当然だ、三等といえば、副隊長クラスだ。

「ちょっと、シロちゃん！まだこっち、シビれてるよ」

悲鳴のような声に顔を上げると、黒髪の女のほうで、痺れを取るた

めか、手をパンパン叩いていた。

「悪いな」

それを見返した冬獅郎の声が、イタズラをした子供みたいに見えた。そして。

俺と冬獅郎以外に、入隊資格者を出すことなく。試験は、終了した。

その日の、夜のことだった。

「日番谷冬獅郎はいるかな？」

襖の向こうから声がして、俺は立ち上がった。

同室の冬獅郎は、疲れたのかスースー寝てしまっていた。

「はい」

襖を開けた俺は、ぽかんと目を見開いた。

そこに経っていたのは、一番隊副隊長、雀部長次郎その人だったからだ。

「日番谷は不在か？」

「はい」

俺は反射的に、嘘をついた。

「それでは、君にこれを託す。入隊受諾書だ、くれぐれも大切に扱うよう」

「は！はい！！」

俺が緊張しきつてそれを受け取ると、副隊長は、少し表情を和らげて、俺を見下ろした。

「今回の試験で、通ったのは日番谷だけだ。

お主も、日番谷には劣るとはいえ、努力次第で光る。精進せいよ」

「は・・・い」

うつむいた俺の表情を見ることなく、副隊長は身を翻し、廊下の奥に消えた。

「……」

襖を閉めることも忘れ、俺は、その受諾書に視線を落したままでいた。

――「日番谷には劣るといえ……」

その、副隊長が残した言葉が、耳によみがえる。

俺は、対等だと……思ってたんだ。

でも、もしかして、いつからか、そう思うのは、俺だけだったのか？

俺の手にした受諾書の向こうで、無邪気な顔で眠る、冬獅郎の顔が見えた。

「君……臨者よ」

気づけば、口に出してしまっていた。一旦滑り出した言葉は、止まらない。

「血肉の仮面、万象……」

焼いてしまえばいい、こんな受諾書。

俺を置いて……お前だけ、涼しい顔して、高みに行こうなんて、許すものか。

汚い自分自身の気持ちに辟易しながら、これまでの違和感が滑り落ちていくのを感じる。

いい子ぶって、いいライバルだなんて言っても、心では違うことを考えていた。

その蒼碧の瞳がこちらを向くたび、ささくれだった気持ちを、更に荒立てられる気がしていた。

いくら平静でいようとしても、自分と比べて、イヤになるのだ。

そして、自分をこんな思いにさせる少年に対して、ドス黒い気持ち

を抱くようになっていった。

俺がやったことを知れば、冬獅郎は俺を、許さないだろう。

焼いてしまえばいい。全てを。

受諾書を握る手に、力が籠る。

その時、ふと頭をよぎる声が聞こえた。

――「俺達、トモダチだ」

それは・・・何度となく、言われ続けていた冬獅郎の言葉。

ライバルではなく、トモダチ。

お前は・・・知っていたのか。ずっと昔から。

俺がお前に追いつけなくなる日が来ることを。

ライバルでいられる時は限られていても、トモダチなら、ずっと変わらずにいられるから。

気づけば、手の中から、受諾書は滑り落ちていた。

畳にすべったそれに手を伸ばすこともできず、俺は畳に手を突いて・

・・・泣いた。

13：感情のない言葉「一護」

『日番谷冬獅郎を、処刑せよ』

ああ、なんて。

なんて、無機質な言葉なんだろう。

ルキアを処刑しようとしてから、まだほとんど時間たってねえだろう？
貴族の娘から、隊長まで。次々殺さねえと成りたたねえような組織なら、いつそ滅びればいい。

冬獅郎の消息が全くつかめねえ中、井上と俺は、浦原商店を後にした。

「ねえ・・・黒崎くん」

遠慮がちな声が、背中にかけられる。

「どうして・・・あたしをすぐ、呼んでくれなかったの？」

その質問は、俺の心をえぐった。

昨日冬獅郎を見つけて家に運び込んだとき、もし井上に声をかけていれば、夜中だろうが井上は来たはずだ。

傷さえ治ってれば、今みたいな焦燥感は、少しはマシになったかもしれない。

草冠宗次郎は、隊長格とも肩を並べるほどの実力だという。
あんな重症で出会ってしまえば、間違いなく殺されるぞ？

「あいつを・・・見誤ってた、のかな。怪我が治るまでは、迂闊に動かねえと思っただんだ」

俺が知ってる冬獅郎は、冷静沈着なヤツだった。

常に、他のヤツよりもちよつと先を見ている。だから、無駄なことはしないと思っていた。

あんな重傷を負えば、傷が癒えるまでは動かないほうがいい、と思うはずだって思った。

でも、アイツは、俺と戦ってでも、先へ進むことを選んだ。

「黒崎くん・・・」

「絶対このままにはしねえぞ、冬獅郎のヤツ・・・」

見る見る間に、巻かれた包帯が血に染まっても。アイツは、全く気にもかけてなかった。

それは、つまり。

自分の体がどうなつてようが、気にならないってことだ。

命を捨てる気のヤツなら、自分の体が多少痛もうと、もう関係ねえって思うだろうよ。

「分かつてねえよ、アイツは」

井上が、俺の前に並んで、俺の顔をちらりと見る。

「大切なヤツに死なれたら・・・残されたヤツはどうしたらいいんだよ？」

「おかあさん」。

その言葉を口にしなくなって、どれくらい経つだろう。

そのひとのことを呼ぶときは、今はこう呼んでる。

「母親」。

それは、冷たい言葉だ。

でも、冷たいといっってくる相手は、もういないからしょうがねえ。

俺の母親は、冷たい雨の振る夜、俺をかばって命を落とした。

俺の体に覆いかぶさったまま、どんどんぬくもりを失ってゆく体。地面を流れてゆく、闇よりも暗い色の血。

俺は、起き上がることもできないまま、「おかあさん」が「死体」

になるのを肌で感じたんだ。

情けねえことだけど。高校になってもまだ、俺は悪夢にうなされてた。

母親が、俺にのしかかる夢。

「あんたのせいで、おかあさんは死ななきやいけなかったのよ」
そういつて、俺の首を、絞める夢。

何度も何度も、うなされて飛び起きたっけ。

そしてある日、同じように飛び起きると・・・ベッドの端に座ってた影に、俺は腰を抜かしそうになった。

「一護。母さんが、お前にそんなことを言うはずがねえだろ」
それは、いつからそこにいたのか、親父だった。

俺は、おそらく叫んでたんだろうな。おかあさん、と。
一体どんな気持ちで、俺が飛び起きるまで、そこに座っていたんだろうと思う。

「俺のせいで母さんは死んだんだ！恨んでねえはずがねえ！！」
俺は、絶叫したんだと思う。親父は、そんな俺をまっすぐに見返した。

「母さんは、お前を愛してる。今でもな。
だから、夢のソレは母さんじゃない。お前を責めているのは、オマエだよ」

そうなのかもしれない。そうじゃねえのかもしれない。
ぐったり力を失った俺の頭を、親父はポンと撫でた。

「だから。必要でもねえのに、自分を苦しめるのはやめろ」

頭では、分かってるんだ。

でも、いまだに俺は、悪夢に苦しみ続けている。

人は、大切な誰かを失ってしまえば。特に、それが自分のせいだったら尚更。

もう何事もなかったかのように、これまでと同じように生きていくことなんて、できないんだ。

「処刑なんか、させねえよ」

俺は、俺を不安そうに見上げる井上を見下ろした。

冬獅郎が処刑されれば。

一体何人の死神が、あんな重たい悪夢を、背負わなきゃいけないのか。

でもそれが分かっているとしても、あんな無機質な命令に、従ってしまうのか。

死神ってのは、確かに偉いかもしれないさ。

世界の秩序を、その肩に背負うには、血も涙も必要ないのかもしれないさ。

でも、あいつらに、血も涙もあるのを俺は知っている。

「でも、冬獅郎くんにあんな命令出したの、仲間の死神なんだよ・

・」

「俺は、死神じゃねえ。死神代行だ！」

だから。処刑を止めるのは、俺しかできないことなんだ。

俺は、アイツの目の色を連想させる、晴れた蒼い空を睨んだ。

14：愛せない人 「乱菊」

「たーいちよ、買ってきましたよ」

「・・・ありがとう」

ぎこちなく礼をいう隊長に、あたしはテイクアウトしてきた紙のコーヒーカップの片方を手渡した。

隊長のは、コーヒーじゃなくてミルクティー、しかもピンクのストロベリークリーム付。

あたしのはブラックコーヒーだ。

甘党なのを密かにコンプレックスに思ってる隊長だけど、プラスチックの蓋に隠されて中身が見えないから、大丈夫。

「こんなモン見たいなんて、変なヤツだな、お前は」

ほう、とお互いの息が、白く染まる。

隊長は、12月の夜空に煌々と輝く、銀色のクリスマス・ツリーを見上げた。

「クリスマスなんだから、ツリー見に来るのって普通ですよ？」

「わざわざ現世までか？」

ため息交じりの隊長の隣に、並ぶ。その銀色の髪を見下ろす。

ふわふわした白い襟のついた、皮製のジャケットにジーンズ姿。

小学生だったら普通しない格好もサラリと似合ってしまうのは、やっぱり中身が死神だからだろうか。

「何だ？」

じっと見つめるあたしの視線を感じ取ったからだろう、隊長が翡翠の瞳を向けてきた。

「いーえ、何でも」

なんでもないけど。あたしは笑い出してしまふ。

そんなあたしを、ますます不審そうな視線が追いかけた。

――「すまなかつた」

それだけ言つて、あたしたち十番隊全員の前で、戻ってきた隊長は頭を下げた。

草冠宗次郎、ていう、学校の同級生のために、護廷十三隊を裏切つた。

その行為は、なんだか、とても隊長らしくつて。

あたしたちは、何も言わずに彼を受け入れた。

あたしたちは「十番隊隊長」だからじゃなく、「日番谷冬獅郎」に従っているんだから。

ただ、自責の念に駆られている隊長に、あたしはひとつ提案を試みた。

――「ごめんなさい月間？なんだそりや」

――「だからあ。隊長が、隊士ひとりひとりの願いを聞いてあげるんですよ」

――「ああ？二百人全員か？」

――「だって隊長、二百人全員に謝らなきゃいけないんじゃないんですか？」

ぐっ……と詰まる隊長を見て、あたしは堪えられなくなって、笑つた。

――「で。お前は何が希望なんだよ？」

――「よくぞ聞いてくれました！あたしはですね」

銀色の、クリスマスツリーが、隊長と見たいです。

そのあたしの一言で、今あたしたちはここ……空座町のショッピングモールにいる。

「……この寒いのに、何がおもしろいんだか」

ミルクティーを手に、隊長が肩をすくめて、先へ行く。

「ダメです隊長、もうちょっといましょうよ」

あたしは、がしっ！と隊長の腕をつかんで、有無を言わず引き戻した。

「何でだよ」

「あと・・・5分！」

あたしは、手首にまいた、金色の腕時計を見て言った。
時刻は17時55分。

「18時に、このツリーの天辺に、ハートマークのイルミネーションが点灯されるんです！」

それを見たら、一緒にいる人と両思いになれるって」

「ばっつかばかしい・・・」

隊長は、心のそこからウンザリした時に使う、とっておきの声音で言った。

「それで、こんなに大勢集まってるのか？みんな信じてるわけじゃねえだろうに」

広場は、いまやカップルたちで埋め尽くされていた。

慣れない高いヒールを履いて、精一杯化粧した女の子たち。

マナーなんて分からないけど、そんな女の子の手をとり、かばうように歩く男の子たち。

みんなツリーを見上げ、今か今かとその時を待っている。

「ええ。誰も信じていないと思いますよ」

あたしの言葉に、隊長はチラリと瞳を向けてくる。

「でもいいんです。」

ここに一緒に来たいって思える人と来れるだけで、その願いはもう叶ってるじゃないですか？」

その時間が近づくにつれ、その場の寒気はぬぐわれ、熱気が満ちてゆく。

「もう6時になるよ！あと10秒！..」

自然と、その場にいるカップルたちの中で、カウントダウンが始まる。

「3！2！1！！」

次の瞬間、ピンク色の光が、銀色の上にまばゆく降り注いだ。

恋人たちの歓声の天辺に、ハート型のイルミネーションが輝いている。

あたしは、華やいだ気分、ふっ……と空白が入り込むを感じる。

光がついたその瞬間、隊長が顔を伏せるのを、見てしまったから。この広場の中できつと、ただ一人だけ。

—— 乱菊ちゃん。もし冬獅郎が処刑されてたら。死ぬつもりだったろう？

たった一週間前に、隊長のおばあちゃんに投げかけられた言葉を、思い出した。

場所は、潤林安の隊長の実家。ここに来てることは、隊長には秘密だ。

あたしは、ことの顛末をおばあちゃんに話し、深く頭を下げたままだった。

おばあちゃんの言葉を、頭の中で反芻して……あたしは、一度だけうなずく。

頭上で、ふう……と、ため息が聞こえた。

「隊長を、死神に誘ったのはあたしですから。

死神として隊長が死ぬことがあったなら、それはあたしのせいでもある」

類まれなる霊圧を持っていたとしても、あたしが出会った時の「日番谷冬獅郎」は、「幼い」という形容がピッタリと来るくらいの子供だった。

そんな子供を死神に誘うということは、あたしだって、それなりの覚悟をしたつもりだ。

絶対にこの手で護りぬく、と思っていた。

立場がこんなにアツサリ逆転するとは予想外だったけど、あたしの気持ちは変わらない。

「乱菊ちゃん」

おばあちゃんは、あたしを柔らかな目で見た。

「子供の頃、きつと、周りの人に愛してもらえなかっただろう？」
ギクリ、とした。

あたしが答えを準備するよりも早く、おばあちゃんは穏やかに続けた。

「冬獅郎も、同じなんだよ」

「・・・え」

「氷のようだって、言われて。大人からも子供からも避けられてた。一度だって弱音を吐いたことは無いけど、あの後遺症を治すのは生半可なことじゃ、できない」

「後遺症・・・」

「自分を、大切にできないんだよ、あの子は。」

愛情を十分に受けなかったから、自分が大事な存在だってことを知らない。

自分なんて、いつ死んでもかまわない、て思ってる」

それは、あたしのことでもある。だから、あたしは黙り込んだ。

「諦めたように見えても。今でも愛情に焦がれてるんだよ、あの子は。」

死ぬなんていわず、大事にしてあげてくださいな。それが婆の願いだ」

スッ、と人ごみから目をそらし、隊長はツリーから離れた。

「待つてくださいよ、隊長！」

あたしの声が届かないわけなのに、振り向きもせず、
どンドン、離されてしまう・・・

この人ごみを感じないように、足早に。

「待つ・・・」

あたしが手を伸ばしても、届かない。

おばあちゃん。

人を大事にするって、どうすればいいの？

大事にされてきた人間なら、それは考えるまでもないこと。
でも、あたしのような人間には、この宿題は重すぎる。

「ねえ、ホワイトクリスマスにならないかなあ？」

「バカ言え、雪なんて最近、降ったことあるか？」

「子供の頃が最後だけど・・・でも、今日寒いから振るかもよ？ねえ、待ってみようよ！」

「やめようぜ、オイ」

不意に、あたしたちの間に飛び込んできた会話。

隊長は、人ごみの輪から外れて、一人ツリーに背を向けて佇んでいた。

不意に、その腕が中空に伸ばされる。手のひらが空を向いた。

ポウ、とその手が青白く輝く。

「・・・あ」

あたしが、声を上げるとほぼ同時に。

「わぁ・・・」

「見ろよ！」

雪、が。

空に、舞い降りた。

みんなが、雪を見上げて、はしゃぐ中。

あたしはやっと、隊長の背中に追いついた。

—— 今でも愛情に焦がれているんだよ、あの子は。

強すぎる、でもまだ小さすぎる。隊長の背中を、あたしは見下ろす。

隊長は、放心したみたいに、降りゆく雪を眺めていた。

手のひらを上に向けて・・・その雪片を受ける。

雪は、スッ・・・と、手のひらで解ける。

水滴になったそれを見守ると、隊長は両手を下ろし、再び空を見上げた。

あたしは、重ね合わせずにはいられなかった。

強すぎる力を持つがゆえに、人と触れ合えなかった幼い頃の隊長を。手を伸ばしたら、誰かを傷つけてしまうから。だからただ、見ているだけ。

笑ってる誰かを、しゃべりあってる誰かを、見ているだけ・・・

この場に居る人々みたいに、「愛情」を信じることが出来ない。

でもきつと本当は、誰よりも焦がれていて・・・そして、誰よりも恐れている。

「・・・」

何かを考えるよりも早く。あたしは、隊長に手を伸ばした。

「っ・・・何だ松本？」

突然、あたしが後ろから腕を回して、抱きしめたものだから。

さすがの隊長も、あたしを振り返って、戸惑った声を漏らす。

「何でも、ないんです」

どうか。

この氷の霊圧で覆われた心に、あたしのぬくもりが、少しでも届きますように。

振り払うか、怒鳴るか、いつもの反応は返ってこなかった。

ほんの少しだけ、隊長があたしに体重をかけてきたのを感じて、あたしは驚く。

でもそれは、ほんの少しだけ。

「帰るぞ、松本」

あたしの腕から抜け出した隊長は、そう言って振り返る。

ああ、本当に、戻ってきたのね。

やっと、そう思うことができた。

「はい！」

あたしは大きくうなずき、その背中を追って歩き出した。

- - - - -

今頃クリスマスかよ！と思った真っ当な貴方、ごめんなさいorz
日番谷くんが飲んでるのは、タリーズのミルクティーinストロベ
リークリーム。

たぶん春限定だけど、ウマイです。

15：表情がない「ルキア」

その世界には、黒と白しかなかった。

闇の中、天の怒りのように、体を叩きつける雨。

愛した男の大きな手のひらが、私の背中に回されている。

いつか、その太い腕に、思う様抱きしめられれば。

心の底で、そう願いつづけていた。

「ありがとよ。心は・・・ここにおいてゆける」
ああ。

そんなことを言わせるために、こんな結末のために、私は貴方を愛した訳じゃない。

海燕殿の胸を、深々と貫いた私の刃。

音も立てず、その体が地面にくず折れる。

「あ・・・あ」

私は、自分の手のひらを見つめた。

血に染まったはずのその手は・・・闇の中で、漆黒に見えた。

「ああああ！」

泣き喚きながらも。

全てはお前のせいだという、冷たい声を聞いていた。

薄闇の中で、私は目を開けた。

胸はどくどくと波打っている。

これが、ただの悪夢だったらよかったのに。

でも、これは。

「現実だ・・・」

つぶやく声は、かすれていた。

冷たい畳を踏み、鏡の前に正座すると、青ざめた、どこか見慣れぬ女の顔が映っている。

あれから、私は笑っていない。泣いてもいない。憤りも、悲しみも

しない。

感情をむける相手を、失ってしまったから。

海を軽やかに飛びぬける燕を、墜としたのは私。

ああ、私はこれからの人生を、死体のように生きていたい。

その日の午後、私は流魂街の外れにある、深い森の中を駆けていた。あちこちに、焼け焦げた跡があり、樹齡何百年も経つであろう大木が、真つ二つに割れていた。

雷電を操る虚がここにいる、という浮竹隊長が手に入れた情報に、間違いはないのだろう。

「朽木、大丈夫か。病人みたいな顔で・・・休んでも構わないんだぞ」

ここに来る前、心配の色を隠しもせずに、私を見た浮竹隊長を思い出す。

「海燕を失ったお前は変わった。虚と見ると、徹底的に倒そうとするだろう」

「任務を遂行しているのみです」

そう返した私を見返した、浮竹隊長のもの言いたげな顔。

せめて同行者を、という声を振り切り、ただ一人でこの地に足を踏み入れた。

森の中心部分で、私は足を止めた。

木の幹と言わず、地面と言わず、緑の苔に一面に覆われた地だ。

木々の隙間から、淡い日の光が差し込んでくる様は、まるで深海のようだった。

竹筒に入れた水を、一気にあおると、喉に水が零れ落ちた。

ふう、と水をぬぐった瞬間。

「！」

ゾクッ！と背筋が粟立った。反射的に刀の柄に手をやっていた。

――虚か？

振り返った先には、ぽつかりと口をあけた、洞窟があるばかり。ヒタ、ヒタ・・・と、小さな足音が耳を澄ますと聞こえてくる。「・・・物騒だな」

日の光を浴び、洞窟から出てきた少年の髪が、銀色に輝いた。驚くほど鮮やかな、翡翠色の瞳が、まっすぐに私を捉えていた。漆黒の死覇装に身を包んでいるところからして、子供ながら同業者か。

「ばっ・・・馬鹿者！どうしてこんな所にいる？」

驚いた分、大きな声が口をついて出た。

「どうしてって」

「この場所は危険だ。すぐに立ち去れ！」

少年は、私の言葉におびえた様子も見せず、それどころか驚いたようにさえ見えなかった。

その代わりに、すう、と右手があがる。人差し指が、私の背後をピタリと指した。

「そういう虚がいるからか？」

え？

「その気配」を感じ取るには、一瞬の間を要した。

感じ取るとほぼ同時に、私は地面を蹴り、少年のほうに跳んでいた。私よりも一回りは小さい肩をつかみ、少年を庇って地面に転がった。ダン！！

さっきまで私たちがいた場所に、巨大な足が振り下ろされた。

身の丈5メートル以上の、虫のような顔をした虚が、私たちを見つめていた。

唾液が滴る舌が、チロチロと真つ赤な口からはみ出している。その体には、白い光・・・稲妻がはじけているのが見えた。

—— どうしてだ・・・なぜ、気がつかなかった？

刀を抜き放ちながら、私は虚と向き合った。

改めて向かい合えば、その虚に、霊圧を消すなどと言う芸当が出来ないの是一目瞭然なのに。

「・・・強いぜ。この虚」

傍らの少年が、虚を見て呟いた。

「少年、お前は隠れている。この虚は私が倒す」

「でも、お前よりもこの虚は・・・」

「絶対に手を出すな」

私は、自分を見上げてくる少年の顔を見返した。睨み付けた、といったもいい。

年長者として少年を助けなければ、という気持ちはもちろんあったが、

それよりも強く、この虚を徹底的に倒したい、と願っていたのは、確か。

私の気配に尋常ではないものを感じ取ったのか、少年が下がった。

「虚は・・・絶対に許さない。私が倒す」

私は虚に向かい、刀を正眼に構えた。

バシッ、と音を立て、稲妻が木の幹にはじけた。

静かな森の中に、光が明滅し、炎が地面を舐める。

「ちっ！」

私は、突きたてようとした刃を弾かれ、地面に飛び降りた。

—— 何という硬い体だ・・・

死覇装に燃え移ろうとした炎を、斬魂刀の一振りで消す。

私の斬魂刀、袖白雪は「氷雪系」の力を持つ。

物を燃やし尽くす力を持つ雷電の虚との相性は、決して悪くはない。しかし・・・これほどまでの力を持っているとは。

「お前は弱いな・・・死神」

ぬらり、と開いた虚の口から、エコーがかったような声が放たれた。おそらくあざ笑ったのだろう、その口角がわずかに上がった。

「・・・こそ」

ぎり、と柄を握る両手に力を込めた。

「強くなりたい・・・」

こんな虚、一撃でなぎ払っただろう海燕殿のように。
鬱々とした仮面の底で、あかく自分の体温を感じる。

シニタイ、シニタクナイ。

そんな終わりのない螺旋から抜け出したい。

「私は・・・強くなりたい！」

刀を振りかぶった、その時だった。

ひゅん、と虚の巨大な体が、軽々と跳躍した。

「何・・・」

振り返った私が見たのは、その巨大な拳を振り上げ、打ち下ろそうとする虚の姿。

そして、その先にいる、虚の拳よりも小さな少年の姿。

「ば——」

馬鹿者！叫ぶまもなく、私は少年の元へと走った。

「逃げる！」

足がすくんでいるのか、微動だにしない少年に手が触れようとした時、目の前が暗くなった。

振り向いた私の眼前に、その拳が迫る。私はとっさに、目をつぶった。

「・・・なに？」

その数瞬が、十秒にも、一分にも感じ・・・私はふと、目を開けた。
襲いくるはずの衝撃は、来なかった。

振り返った私の眼に映ったのは・・・数センチ先に迫った拳。

そして、その拳を受け止めていたのは、その拳の百分の一くらいしかない、小さな手のひらだった。

「お前・・・」

少年の翡翠の瞳が、チラリと私を見やった。

「俺がやる」

だらりと下げた右手が、青白い光芒に包まれる・・・と同時に、恐ろしい霊圧が周囲を制した。

その光が、やがて一本の刃の形を作り始めた。

—— そうか。

その時になって私は気づいた。
ゾクリとして振り向いた先にこの少年がいたのは、気のせいではなかった。

そして、虚の気配に全く気づかなかったのは・・・虚よりも遥かに強い、この霊圧があつたからだ。

「なに・・・」

少年の手のひらに触れられた拳が、一瞬のうちに氷に覆われた。
氷は腕を伝い、肩を覆い、瞬きをするうちに顔へと迫っていた。

「貴様・・・」

虚が拳を離れた時、少年は手にした刃を軽く、その場で一閃させた。
「なに・・・ものだ」

刀が生み出した衝撃波。 たったそれだけの動きで、ピシッ、と虚の体に、一本の線が入った。

そして、やけにゆっくりと、その体が血を撒き散らし、地響きを立てて、地面に倒れる。

虚の濁った瞳と、少年の澄んだ瞳が交差する。

「俺は、日番谷冬獅郎。」

—— なに？

その名に、私は瞠目する。

日番谷冬獅郎。 それは、つい一ヶ月前、十番隊の隊長に就任したという者の名だ。

年若いとは聞いていたが、これほど幼さの残る少年だったとは。

虚の体がピクリとも動かなくなったのを確認し、少年は私のほうを振り向いた。

「失礼致しました。 ひつ・・・がや、隊長」

私の呼びかけに、戸惑ったような顔をしたのは、一瞬。

「ああ。 大丈夫か」

すぐに「隊長」の貌になり、私を見返した。

「どうして、ここに」

「朽木白哉に頼まれた」

「・・・え」

思いもかけない名に、私の思考がとまる。

海燕殿を私が手にかけた後、兄様と私は、ほとんど口らしい口を利いていない。

兄様が、海燕殿を遠ざけながらも、どこか憧憬に似た瞳を向けていたのを、知っていたから。

「お前は朽木の妹で、浮竹の部下だろう。上官を失おうが、お前の役割は続いてるんだ。

一人でもお前を求める人間がいる以上、死ぬんじゃない」

ぶつきら棒な口調で、日番谷隊長が私に言った。

それは、もしも慰めだとしたら、なんと不器用な表現なのだろう、と思う。

それでも。その声は、迷い続けた私の心に、よく通った。

「・・・はい」

凍てついていた心に、ほんの少しだけ、光が当たる。

おそらく私は、微笑もうとしたのだろうか――

無機質な電子音に、私はハッと目を開けた。

そこは、薄暗く狭い空間だ。

その場所が、黒崎一護の部屋の物置の中だ、と気づくのに、しばらく時間がかった。

――　　なんだ、また夢だったのか・・・

寝ぼけながら、着信音を鳴らし続ける伝令神機を手を取った。

「もしもし！ルキアか。俺だ！」

聞こえてきたのは、恋次の声。私が完全に覚醒し切る前に、恋次は息せき切って告げた。

「日番谷隊長に、処刑命令が出たぞ！」

ああ。

私は、また、悪夢の中なのか？

スルリ、と私の手から伝令神機が滑り落ちる。

「これも、現実か」

覚めない現実^{ゆめ}に、私はどうすることもできず凍りついた。

16：振り返りたくない過去 「日番谷」

「銀髪と黒髪のカキだ！絶対、隊舎から逃がすんじゃないヨ！」
神経質な、男にしてはカン高い声が、廊下に響き渡った。

―― まずい・・・

このままいけば、捕まる。捕まればきつと・・・命がない、どころじゃない。

何しろ相手は、十二番隊隊長・涅マユリなのだから。

「まずいことになってきたな、冬獅郎・・・」

隣に潜んだ男の声に、俺はうんざりした視線を向けた。

―― 今頃気づいたのかよ！

こいつがこの話を持ってきた時点で、「まずい」香りならプンプンしていたのだ。

なにしろ、この男は、厄介ことを拾うことにかけては、達人なのだから。

草冠宗次郎。

俺は、そいつの白い横顔をにらみつけた。

「日番谷頼む！手を貸してくれ！」

それは、昨晚の話。

俺と同室の草冠がつれて帰ってきたのは、蒼い顔をした同級生だった。

パン、と手を合わせた同級生「貴志川」を、俺は覚めた顔で見返した。

「拝むな」

こちらら、というよりも全員そうだが、三日後に次学年の進級試験を控えた身なのだ。

首席の俺でも、これから三日はカンヅメで勉強しなければ受かる自信がないんだ。

ろくに会話も交わしたことがないこの同級生に、拝まれている時間などない。

「そういうなよ、冬獅郎。このままじゃ貴志川、涅隊長の餌食になっちまうんだぞ」

取り付く島もない俺の態度を見て、草冠が割って入ってきた。

「大体なんで、涅隊長の私室になんて、もぐりこもうとしたんだ？」
そう。こいつは、何を思ったのか、あの涅隊長の部屋にこっそり入り込もうとしたらしいのだ。

餌食にされるどころか、飛んで火に入る夏の虫だ。

「そつ、それは・・・」

俺たちの前に手を着いたままの貴志川が、口ごもりながらも説明した。

「一時的に記憶力が良くなるクスリを発明したって、精霊廷通信に出てたんだ」

ああ。

精霊廷通信で涅が連載している『脳にキク薬』に、そんなことが書いてあった、と思い出す。

「なるほど。そいつを盗み出して、3日後の試験勉強に使おうとしたのか？」

コクリ、と貴志川がうなずくのを見て、俺はうんざりした。

まあ、進級試験がやたら過酷なことは俺も認める。なにより出題範囲が広すぎる。

だからって、死に物狂いで勉強してる俺たちをよそに、薬に走るか、普通？

「そしたら、涅隊長に見つかって・・・」

逃げたら、『明日にでも実験材料として迎えにあがるから、待つて
いるんだネ』って」

怖い。

おそらく、見逃したのもワザとだろう。

何日間も怖がらせた後、実験体として捕えるつもりとしか思えない。

「で？俺たちに頼みって、何なんだい？逃げる手助けかい？」

草冠が貴志川に聞いたただすのを聞きながら、俺はため息をついた。
隊長相手に逃げ切れるヤツがいたら、真央霊術院の学生やってるワ
ケない。

「いや。逃げ切るなんて、無理に決まってる。

盗もつと入り込んだ時、その「記憶薬」の横に、もうひとつ薬があ
ったのを、見たんだ。

その名も「忘れ薬」。

説明書きみたら、ここ3日の記憶を全て忘れさせるものらしい」

「なるほど。それを涅隊長にブツかければいいということだね」

「そうそう！そうなんだ！」

「待てよ、オイ・・・」

俺は、痛んできたこめかみに手をやって話をさえぎった。

盗みはいけないことだと、誰かに教えてもらわなかったのか、コイ
ツらは？

「日番谷ア、毒を食らわば皿までだぜ！」

「違う」

「大丈夫、俺たちならできるさ！」

「できない」

「日番谷ア、頼む！」

・・・そして。

今の状態があるわけである。

ちよっとした好奇心も手伝い、ついここに来てしまったことを、俺

は激しく後悔していた。

「どうする？冬獅郎・・・」

「もう俺たちも顔見られてんだ、例の忘れ薬手に入れるしかねえだろ」

盗みに入った俺たちが悪い。

悪人面してるが、あの涅マユリのほうが正しい。

分かつちやいるが、今捕まって真央霊術院に突き出されたら、きつと即退学だ。

カツーン、カツーン、と音を立てて、誰かが廊下を歩いてくる。

「そこにいるのは分かっているヨ！」

―― 涅・・・マユリ。

さすがに隊長格、全身から放たれている霊圧はハンパなものではない。

ごくり、と草冠が唾を飲み込む音が聞こえた。

「戦うか？」

「しょうがねえな」

互いに、肩に背負った刀に手をやる。

いまだ名前を知らぬ、その斬魂刀は、瓜二つの形状をしていた。

持ち主の魂から形作られるはずの斬魂刀は、二本と同じものがないのが通例だったが。

なぜに見た目が同じなのか、俺たちにも分からなかった。

この斬魂刀が「目覚めた」時、本当に瓜二つかどうかは明らかになるんだろうが・・・

俺たちが、現時点でこの刀について知っていることは、ひとつだけだった。

「同時に行くぞ」

「ああ」

二人が霊圧を刀に込めると同時に、まったく同じ青白い光が、その刀身を覆った。

「ウン？ガキにしちゃ、やたらと高い霊圧だネ・・・どっちのものかネ」

涅が廊下で立ち止まったのだろう、足音が消える。

涅でさえ、「どちらの霊圧」が見分けることはできないだろう。

なぜなら、俺たちが同時に斬魂刀を振るうとき、その力は完全に溶け合い・・・常の力とは、比べ物にならない霊圧を生み出すからだ。

「行くぞ」

どちらともなくそういつて、柄を握り締めた、その時。

「ここだネ」

涅の声が聞こえた・・・と思ったときには、何かが俺たちが潜んでいた壁を突き抜けていた。

強固なはずの壁が、おもちゃのように石くれに分かれ、弾け飛ぶ。

「な・・・」

俺が視界に捕らえたのは、「手」だった。崩れた壁の向こうに、涅の姿が見えた。

その右腕が、手首のところから切り離されている。

手首と、飛んできた手のひらは、管のようなものでつながっていた。

——　こんな飛び道具、アリかよ！

「危ない！」

草冠が、俺の目の前に迫った手の前に、とっさに引き抜いた鞘をかざした。

ガッ！！

音を立てて、鞘を涅の手が握り締める。

そのとたん、鞘が紙筒のようにくしゃりと握りつぶされた。

「草冠！」

「分かつてる！」

俺たちは、抜き身の斬魂刀の刃を交差させ、涅をにらんだ。詠唱破棄の状態では威力は下がるが、この場合しょうがない。

「破道の八十一、氷牢壁！！」

二人が唱えた時。青白い光がその場に炸裂し・・・直後、その一帯の建物が、崩れ落ちた。

「なあ。日番谷。聞いてくれ」

「聞いてる」

「仮に戦いになったとしても、こう言うつもりだったんだ。

『ちよつとうつかり壊してしまいました』て」

「隊長を氷漬けにしといて、うつかりは無えだろ」

「そうだよなあ」

草冠はため息をつき、目下の状況を見渡した。

50メートルに渡って天井が落ち、壁が崩れ落ちた建物は、もはや建物の役割を果たしていない。

そして、その廊下の中央に、2メートルほどの氷の結晶が見えた。その中に封じ込められているのは、涅マユリ。

「何・・・」とでも言いたかったのか、「に」の形に口が開いている。

本来広範囲を凍らせる技を、一箇所に集中させたのだ。

高位の死神でも、そう簡単にこの氷を破壊することはできない。

「とにかく。涅の部屋に行くぞ。とつとと終わらせたい」

俺は、さっさと踵を返して走り出した。

薬を飲ませるか、振り掛けるかするなら、いったん氷から開放しないといけないが。

とりあえず、その悩みよりも、今は薬を手に入れるほうが先だ。

「貴志川に聞いたのはこっちだ！」

「ああ。ここか？」

もつとも簡単な鬼道「塞」を使ってドアの入り口を開けると、部屋の中は薄暗かった。

手術台のようなベッド、何か出てきそうな物置・・・間違っても棲みたくない造形だ。

「これかな」

草冠が、棚の上においてあった瓶に目を走らせる。

俺も参加したいが、悲しいかな身長が足りない。

「おつ、これだ！」

草冠が、手のひらに収まるくらいの瓶をつかんで、日番谷を見下ろした。

中には、無色透明な液体が半分ほど入っている。

「これを、どうにかして涅隊長に飲ませれば・・・」

「方法を考える必要は、なさそうだぜ」

俺は、抜き身の刀を構えながら草冠を見上げた。

「もつ、こっちに来てる」

「へ？」

二人して、締めたドアを見つめ、ごくり・・・と唾を飲み込む。その音が聞こえるくらい、周囲は静寂に閉ざされている。

・・・

「もう遊びは仕舞いだヨ！！！！」

バーン、と戸が開き、目をギョロつかせながら涅が部屋の中に顔を差し込んだ。

「うわー！！」

「ぎゃー！！！！」

その迫力に、俺たち互いの肩を抱き、すごい勢いで後ずさった。

「どうしてくれようか、キミたち・・・」

ヤバイ薬を決めてきたような顔で、涅が一步一步、二人に歩み寄る。
「面白い物を見せてくれたネ。」

双子の斬魂刀だけでも稀有なのに、同時に使うことで力を高めるとはネ。興味深いネ」

「ど、どうする冬獅郎・・・ん？」

焦りまくった草冠の声が聞こえる。

俺は、小瓶に書かれた説明書きに眼を走らせた。

「使い方はどこだ！」

「そんなことやってる場合じゃない！涅隊長が・・・」

「そっちは頼む！」

「代わってくれ！！」

「この私を、無視してるんじゃないヨ！」

ふわ、と大きな影のように、一瞬で涅が俺たちに襲い掛かる。

「も、もうダメだ・・・！」

「ええい！」

飲ませるなんて出来るわけない。だとすれば・・・

俺は、とっさに瓶を涅に向かって、投げつけた。

それは、俺たちに襲い掛かろうとした涅の肩に当たり・・・割れた。

「ン・・・こ、これは！！」

涅が、初めて狼狽した声を出す。

直後。

瓶の中身が爆発し、周囲はもうもうとした煙に覆われた。

「ふむ」

俺たちの前に座っているのは鬼瓦重蔵・・・真央霊術院での担任で

ある。

場所は、真央霊術院の職員室。

全校同時に行われる進級試験の準備のため、職員室内はシンと静まり返っていた。

「なぜ十二番隊舎にいたか、まったく覚えがないと？」

「はい」

俺たちは同時にうなずいた。

ふーむ、と鬼瓦は再び首をひねった。

「どうやら、十二番隊長の涅槃も、ここ3日ほどの記憶を無くされているらしい。」

ただ、いくらなんでも、学生のお前らに、あれほどの破壊をする能力はない、という見解では一致している」

「いえ先生、俺たちの力を合わせ・・・うっ！」

身を乗り出した草冠のふくらはぎを、俺はこっそり蹴った。

「とにかく、進級試験に今は集中しろ。」

まあ、首席・次席のお前たちに言う必要はないだろうがな」

笑みとともに、肩をバンとたたかれ、俺たちは職員室を後にした。

「・・・あれは、俺たちがやった可能性高いよな」

「・・・俺もそう思う」

草冠の問いに、俺はうなずく。

しかし、一体どういうわけなのか、ここ3日の記憶が全くないのだ。二人揃って・・・ということは、なにやら涅槃に変な薬でも飲まされたんだろうか。

でも、涅槃自身も覚えていないらしいから、原因は闇の中だ。

「ん？あれ誰だ？」

俺は、廊下の向こうで足を止めた人物を見やった。

「もうちよっとクラスに関心もちなよ。あれは貴志川だよ」

「何で、俺たちに頭下げてんだ？」

「さあ・・・それより、俺たちも早く教室へ入ろう」

なんとなく、自分たちが「やっちゃいけない何か」をやらかした、という自覚はあった。

ただ、覚えてない以上、自責の念に駆られてもしょうがない。

そう思つて、テスト用紙を見た俺たちは、凍りつく。

―― な・・・何にも、思い出せねえ・・・

この3日、必死で覚えた全ての事柄が、きれいさっぱり頭から消え去っていた。

2人揃つて追試を受ける羽目になつてからというもの、なんとなく涅への印象が悪くなつたが、それはまた、別の話。

- - - - -

せつかく、「切ない10のお題」をもらってきたのに・・・台無しw

17：雪原の中…「日番谷」

もう、どれくらい前になるだろう。

草冠と二人で、精霊廷の飲み屋に行ったことがあった。

それは、草冠と俺の真央霊術院卒業が、決まった春のことだった。

ただ、飲み慣れない酒はひたすら、苦くって。

なんでこんなモン飲んで、他の死神たちは楽しそうな顔してんのか、全然分からなかった。

なあ。日番谷。

ほどなく顔を真っ赤に染めて、机に突っ伏したアイツは、何度も何度も繰り返した。

絶対リベンジしようぜ。いつか、酒をお前と酌み交わすんだ。

そしてその頃には、お前も俺も隊長になって。

双子の斬魂刀を持つ隊長として、名を馳せてるといい。

絶対だぞ。約束だ。

分かった分かった、て俺は返したっけ。

俺も朦朧とするほど酔っ払ってたけど、それでも、その言葉だけは耳に残った。

「・・・行けよ、冬獅郎」

黒崎一護の声が、その場に静かに通った。

その言葉は、やけに静かで、穏やかな・・・引き金だった。

俺は、手に「氷輪丸」を握り締め、雪の中を歩みを進めた。

雪原に膝を着いていたのは、俺と同じ、「氷輪丸」を持った一人の男。

「・・・終わりにしよう」

「・・・そうだな・・・」

静かな答えが、返ってきた。

見下ろした氷輪丸の刀身は、なんだか暗く、沈んだ色に見えた。

「・・・俺は、お前を見誤っていたよ。

お前が護廷十三隊を離脱したとき、てつきり俺と手を組むつもりだ
と思っていた。

・・・もう一度聞こう。日番谷冬獅郎」

疲労困憊してるはずだが、それでも疲れを見せずに立ち上がり、そ
の重色の瞳が、まっすぐに俺を見据えた。

「初めから俺を殺すつもりで、護廷十三隊を裏切ったのか」

殺すつもり。

その言葉を、俺は反芻する。

「あんまり、考えてなかったな・・・」

口について出てきたのは、自分でも思いがけない言葉だった。

「死ぬとか、生きるとかは思いつかなかった。ただ、決着をつけた
かったんだ。

くだらねえ風習とか、ルールとか、地位とか。

そんなのに影響されねえ、ただの日番谷冬獅郎として」

「冬獅郎・・・」

黒崎が、俺の言葉に我慢できなくなったかのように、つぶやくのが
聞こえた。

「お前、結局草冠のために全て捨てたんだろ！地位も、部下も、自
分の命も！

草冠、こいつはもう十分、お前の味方だったんだ」

共に来い、と差し出された手を、取らなかったとしても。

それでも、俺の心は草冠と共にあった。

それを、否定する気はいまさらない。

俺は、刀を構えた。シンメトリーに、草冠も刀を構える。

「なぜだ！なんで、殺しあわなきゃならねんだ！」

黒崎。

なんでこいつは、俺たちのことで、こんな必死な顔してんだ？
考える、とその顔が言っている。

なんだ。

その問いの答えに、ちらりと思考を走らせた時・・・

「スキだらけだぞ！」

目の前に、草冠の姿があった。

草冠は瞬歩の達人だった、ということを出すよりも早く・・・
刀が鞘走る。

「冬獅郎！」

その叫びと共に、俺の脇腹から血がほとばしった。

「くっ・・・」

雪原に真紅を撒き散らしながら、俺は後ずさる。

「相変わらず優しいな、冬獅郎は。俺のために戦うというか」
言葉とは裏腹。

血刀をだりと下げ、草冠が俺に歩み寄った。

「俺は俺のために戦うよ。俺を裏切った護廷十三隊を、皆殺しにし
てやる」

その怒りがこもった言葉に、俺は顔を上げる。

「君の無垢な幼馴染も。副官になった松本乱菊も。一人とて逃がし
はしない」

「何でだ・・・」

俺は、腹の底からわきあがってきた、衝動を抑えながら顔を上げた。
「なぜ殺させる。なぜお前は・・・」

「もう後には引けないんだよ、冬獅郎」

草冠の声は、穏やかだった。

「俺は死神を許せない。そして君は、部下や仲間を殺す俺を、絶対

に許さないだろ？」

「草冠・・・」

「気づきなよ、冬獅郎。」

隊長の称号を捨てようと、君はもう誰よりも・・・『隊長』なんだ
つてことに」

反論しようとして口を開いた。

俺はもう隊首羽織を捨てた。隊長の座も剥奪されてるだろう。

でも、そんな言葉は、口から出る前に淡く消えた。

隊長の座なんか要らない。いまだに重みも分らない。

でも、仲間を、部下を殺させるのだけは許せない。

俺たちは、もう変わってしまったていたんだな。

俺は、初めてそれに思い至った。

心のどこかで、俺たちは変わらないと思っていた。

分かり合えていると思っていた。

それでも、隊長となった俺と、復讐を願いつけたあいつは、遠く遠く
離れてしまっていた。

もう、戻れない。

「・・・いくぞ、草冠」

「来い！」

雪を蹴ったのは、同時だった。

互いに一步も引かず、正面から刃を打ち下ろした。

一瞬後、焼け付くような痛みが肩に走る。

そして、それと同時に、俺の刃が、ずぶりと突き立った感触があつた。

ダン、と音を立て、互いの体がぶつかった。

「・・・」

俺の耳の横には、俺と全く同じ、「氷輪丸」の刀身が見えた。

俺の血で紅く光ったそれが、光芒を放つ。

「ぐ……」

肩にかかったぬくもりが、大きくのけぞり、血を吐いた。

「と・うしろ……」

ガツ、と肩を捕まれる。それでも、俺は顔を上げることができなかった。

草冠の視線を、顔に感じた。

「なあ、冬獅郎……」

震える息が、頬にかかる。

「まだ、酒は美味くないか？」

ハッ、と俺が顔を上げたとき。

その姿は、幻のように消えていた。

後に残ったのは、焼け付くような、体の痛みばかり。

雪原に残った、草冠の足跡だけが、アイツがそこにいたことを証明しているようだ。

「ああ……」

俺は、つぶやいていた。

なんで俺は、隊長になりたかったんだろう。ふと、そう思っていた。草冠の事件のあと、あれほど憎んだ死神の組織に入り、死に物狂いで修行したのはなぜだ。

もしかすると、草冠との、くだらないあの約束……

そんなものを護ろうとしていたのかもしれない。

身を切るような冷たさの気が、冷たい頬をなぶった。

「まだまだ、美味くねえよ」

それなのに。お前は速く走りすぎた。

苦い、苦い思いが、俺の心を満たした。

あの日口にした酒のように。

18：ベッドで一人「乱菊」

猫みたいな女。そういわれたことがあった。

グウタラで、気ままで、好き勝手やってるってワルクチを、許したのは二人だけ。

確かに、その二人の前では、あたしそうだったもの。

裸のまま、ベッドに寝転がる。煙管から口を離すと、紫煙が天井に立ち上った。

でも、あたしを猫だ猫だと言った二人は、あたしの手の届かないところに、行ってしまった。

一人は虚圏へ。もう一人は、どこにいるのかも分からない。そっちのほう猫系だとは、知らなかったわ。

「おい！松本！どこだ！」

寢床でまどろんでいたあたしは、舌足らずの声に、ふっと目を開けた。

視界に浮かんだのは、白いシートと、その向こうにいる、ギンの姿。申し訳程度に、あたしは赤、ギンは白の襦袢を羽織った姿。

赤と白が混じっているところが、なんだかものすごくヒワイに見えた。

「呼んではるで？かわいい声やん、返事してやり」

「こんなトコに呼びつけようっての？御免よ」

日番谷冬獅郎。あたしが拾った、泥の中の寶石。

真央霊術院に入学して、まだ半年だというのに、すでに霊圧は席官レベルだと言うから、驚いてしまう。

「でも、こっちに向かって来とるよ？」

「バカ、ギン、霊圧消して、霊圧・・・」

チカラが強いつていうのも、考え物。

例え返事をしなくても、気配で分かってしまうか。

今すぐ着替えて取り繕えば平気だけど、正直そんなことするのは、おっくう。

そう思つて、ふわぁ・・・と大きく欠伸をしたとき。

ガラッ！！

いきなり、戸が開いた。

「オイ松本、いつまで寝てんだ！！」

やっばい・・・

あたしは、息を殺して、寝たふりをする。

衝立に隠されて、あたしとギンは見えてないだろうけど・・・踏み込まれたらおしまいだ。

あたしにだつて、一応、常識つてものはある。

「ジョージの後」を冬獅郎少年に見せちゃいけないっていう分別くらいはある。

「何だよ、寝てんのか？」

そうよ。寝てる女の布団を覗き込むのは失礼なのよ？

でも・・・この子の育ちがそんなによくないことは、残念ながらあたしはよく知ってる。

衝立に、遠慮もへったくれもない小さな指がかけられた、と思ったとき・・・

豹のような動きで、ギンが衝立を押し倒した。

「えっ??」

驚きもまだ追いついてない、目を見開いた冬獅郎の顔が、衝立の向こうに見えた。

ギンは冬獅郎の足首をつかむと、一気に布団の上に引き倒す。

「誰だお前！」

あわてて起き上がろうとした冬獅郎の胸に、ダン！と拳をついた。

「アカンなあ。子供がこんなとこに踏み込むやなんて・・・」

冬獅郎の瞳が凍りつき、ギンに吸い込まれるように、向けられるのが分かった。

至近距離でニヤリ、とギンが亀裂みたいな笑みを浮かべる。

「食ってほしいんか？」

蛇みたいなの、紅い目。たいていのヤツが、この紅に、吞まれてしまう。

「ふざけんな、このバカ狐が!」

でも。カキーンと音がするように小気味よく、冬獅郎はギンに言い返した。

「おもしろい子やなあ。ボクが怖ないんか？」

「全然」

ああ、ギン。その子は、脅されてくれるほど、かわいらしくないわよ。

大体・・・あたしだって、この事態を微笑ましく見守るギリはない。

「ふざけんな、この雑食があ!」

横合いから見事なローキックを、ギンの頬に見舞ったのは、当然のこと。

「ひどいわあ、乱菊・・・頬を張るくらいなら可愛げあるけど、蹴り入れんでもいいやろ」

「うっさいわね、このバカ狐」

「バカ言ったらあかん! せめてアホにしてや」

「意味分かんね」

冬獅郎はふう、とうんざりしたように言う。
「気まずい。」

妙にニコやかなギンはとにかくとして。

あたしだって花も恥らう乙女だから、こんなトコに踏み込まれてうれしいわけない。

冬獅郎は冬獅郎で、なんとも尻の座りが悪い顔してる。

なんでこの3名で、ちゃぶ台を囲まなきゃいけないの？

あたしたちは、全く予測せずに作り出してしまったこの空気に、ため息をついた。

考えてみると。

あれが、あたしたち3人の初対面だった。

くだらない会話して、罵り合って、同じ机の上のものを食べて、飲んで。

しょうもない日常のヒトコマが、最初で最後だったなんて知っていたら、もう少し楽しもうとしたのかな。

今こんな風に、たった一人で朝を迎えるあたしがいると、知っていたら。

あたしみたいな美女を一人で寝かせて、何やってるのよ。

背中を追うなんて忠犬みたいなマネ、逆立ちしたってしやしないけど。

でも、追わせてもくれないなんて、ヒドインじゃない？

19：生活感の無い部屋 「夜一」

その部屋を訪れようと思ったのは、まったくの気まぐれじゃった。百年前まで暮らしていた、四楓院家の、自室。

精霊廷追放、という貴族にあるまじき恥を与えた当主の部屋として、焼き払われでもしているかと思っていた。

だが、盛り塩ひとつあるわけでもなく。お祓いの後もなく。

その部屋の扉を開けたとき、儂はポカンとして、部屋の中を見回した。

キシキシ、と畳が足の重みで音を立てる。

百年前儂が気に入っていた着物には布がかけられ、文机の上には、百年前、儂が読みさした本が、そのままにおいてあった。

百年前のカレンダー、百年前の時計。

百年前の。

百年前の。

それは、どんなに儂がいた頃を変わらぬよう留めたとしても、やはり、生活感とは抜け落ちていた。

ずっと主を待ち続けたこの部屋、そして整え続けた誰かの手。

それを嬉しいのではなく、面倒くさいと感じるサツパリ具合は、儂自身うんざりするが。

そういう性格なのだから、しょうがない。

部屋に入ると、いつも儂が座っていた椅子に、ぼふっと尻を落としたりした。

そして、目の前の文机の上に、懐から出した小さな金印のようなものを置く。

昼下がりの光を受け、表面に様々な装飾を施されたその黄金は、繊細な色にきらめいている。

王印。

それが、今回の騒動で、争点になっていた王族の宝だ。

日番谷冬獅郎によって奪い返された後、王印は正式に、王族に返還される運びとなった。

こんな物騒なもの、使いこなせぬでは、精霊廷においておく意味もない。

——「頼んだぞ」

儂に声をかけた、山本総隊長を思い出した。

——「追放者に頼みごととは、似合わぬな」

ニイツと笑ってみせると、総隊長は口ひげの向こうで、苦笑したようだった。

——「どうやって、王族にこれを返すのじゃ？」

——「なに。返還するつもりだというのは、王族には伝わっておるはずじゃ。」

こちらは、ただ待つだけじゃ」

偉そうに言っただけだが、実は特に知恵もない。

ただ、「彼ら」とて、王印をこのまま精霊廷においておくつもりはないだろう。

いかなる手段で、これを引き取りに来るのか・・・儂は、ふわあ、とアクビをした。

「・・・ん？」

文机の上に無造作に置かれていた、写真立て。

こんなもの、儂は覚えがない。

写真に記憶がないというよりも、自分の写真を額縁に入れて飾る趣

味がない。

ひょいとり上げ、まじまじと写真に見入った。そこに写っていたのは、当主を務めていた頃の、着物姿の儂自身だった。

そして、その両側には、一目で双子と分かる、似た容姿の子供が立っている。

身長は、儂の胸よりも更に下・・・おそらく7歳くらいだろう。

男児にしては長めの、すんなりとした髪は、日の光に透けて、茶色に見えるくらい明るい。

左側はやや目が丸みを帯び、右側は切れ長、くらいの違いしか二人にはなかった。

「・・・懐かしいの」

気づけば、つぶやいていた。

王廷からの授かりものを管理する立場だった四楓院家には、王家の人間もお忍びで訪れることがあった。

この2人は中でも、自分によくなっていた記憶がある。

フツ、と儂は頬をほころばせた。

「相変わらず悪戯が好きなお方じゃ。・・・緋鹿の若殿」

すると、写真の中の、小指の先よりも小さい、右側の少年の顔が・・・ニイツ、と笑った。

百年前と、全く変わらぬ笑顔で。

いや、この写真が百年前のものなら、変わりようがないのだろうが。

「夜一姐さん、久しぶりだね」

左側の少年の口が動き、写真から声が漏れた。

「探し物は、これですか」

机の上の王印を見せてやると、ウン、と無邪気に頷いてみせた。

「はて。儂は最近年のせいか、近くのがよく見えませぬ」

「よく言うよ」

右側の少年が、唇を尖らせる。

「なぜ、貴方たちがこの役目を仰せつかったか、儂には想像がついているのですが」

机の上に頬杖をつき、写真を至近距離で眺めると・・・儂は2人に笑ってみせる。

「たとえば、この王印で、お遊びになったことがあるのでは？」

右側の少年は、キョトンとする。

大して左側の少年は、ニツコリと笑った。

―― アタリ、じゃな。

草冠宗次郎は、「自分が死にかけた時、上を王印を持った貴人が通りかかり、その力の力ケラが降り注ぎ、助かった」と言っていたらしい。

それが、全く事実と異なっていることを見抜けるのは、今は儂くらいじゃろくな。

その時、王印は四楓院家に在り、何十年かに一度場所を移す、その周期にはあたっていない。

大体、瀕死の人間を復活させるほど、王印を使いこなせる者は、精霊廷にはおらぬのだ。

それをやってしまうとしたら。

王廷の住人で、精霊廷にも出入りがあり、ちょっとばかり悪戯好きだった・・・

この少年たち以外の仕業とは、考えられぬのだ。

「言わなければならない？」

左側の少年が、小首をかしげてこちらを見つめてくる。

全く、写真では少年だが、実物はもういい年の大人だと思うんだがな。

「いいえ。結構ですよ」

僕は、王印を手に持つと、その写真に近づける。

二つがぶつかる・・・と思った瞬間、スウ、と王印は消えた。

そして、よく見れば・・・右側の少年の手に、さっきまでは無かった王印が握られているのが見えた。

「ああ」

2人の少年が、同時に後ろを見やった。

「恵蓮が呼んでる。僕たち、行くよ」

「またな、夜一。・・・今何か言おうとしたか？」

「いいえ。何なら、もうちよつと遊んでいてもいいですよ、とおうとしたのみです」

振り返った双子の目に、悪戯っぽい光が宿っている。

全く、変わらぬな。

そう思った時には、写真立ての写真はぼう、と発光していた。

そして、光が途絶えたとき、その写真には、僕と風景しか写っていなかった。

20：白い吐息 「オールキャラ」

白い吐息が、夜空にふわりと、浮かんで消えた。

「星がキレイよ、こっちは。」

黒崎くんのところも、もうちょっとしたらきつと、雲が晴れるわ」
携帯電話を手にした織姫が、明るい声で、手にした携帯電話に呼びかける。

話しながら、階段をあがり、自室へと向かった。

部屋の前のネームプレートを見て、ふふつ、と微笑む。

そこには、前からあった「井上織姫」に加えて、「日番谷冬獅郎」

「松本乱菊」の名前が書き加えられている。

—— 今頃、ソウル・ソサエティでなにやってるかな。

織姫はもう一度、夜空を見上げた。

「おーう。けどまあ、もう寝るわ。明日早いからな」

おやすみー、と間延びした声を漏らして、一護は携帯電話を切った。
そして、ベランダから続く部屋のガラス戸を開け、部屋のフロアリングに寝そべっていたルキアを見下ろした。

「おいルキア、俺着替えるから、押入れの中入れよ」

「何だ、恥ずかしいのか？ 色気つきおって」

悪戯っぽい目で、ルキアは一護を見下ろす。

苦虫を噛み潰したような渋面を返した一護を見て、ククツと笑いをかみ殺す。

そして、電話の会話に意識を戻した。

「姐さん！ 押入れに入るなら俺も一緒に！」

「うるさい黙れ！」

しがみつこうとするコンを、ルキアはぎゅむ、と床に押さえつける。

そして、伝令神機を耳に押し当てた。

「ん？あ、違う。こつちの話だ。・・・ああ。精霊廷はもう落ち着いたか？」

日番谷隊長も隊務に戻られたのか？それはよかった」

電話の声に頷くルキアの表情は、心配事がすべて拭いされたように明るい。

「明日、そっちに戻る。お前も今日くらいは早く休めよ？恋次」

受話ボタンを押し、電話を切った恋次が、パシンと音を立てて伝令神機の蓋を閉じた。

「せえやあ！！」

裂帛の気合と共に、木刀を構えた死神たちが汗を散らして行きかう。場所は六番隊の修練場。白哉の姿はどこにも見当たらない。

おそらく、隊首室で残務整理に追われているのだろっ、と恋次は腰をあげた。

渡り廊下で、ふと外の通りを見やった恋次は、月光の中ひそやかに歩む人影を見つけて声をかけた。

「おい、雛森。オマエ、出歩いて大丈夫なのか？」

「うん、大丈夫よ。ちょっと、十番隊に行こうかと思って」

月明かりの中で微笑む雛森は、一回り小さく見えるほど痩せてしまっている。

周りに気を使っただけ「大丈夫」と微笑む表情が、あまりに無理をしたもので・・・その度にもどかしい思いをしたものだった。

だから、今夜の雛森の心から出た自然な笑みは、なんだか懐かしく見えたほどだ。

大事な幼馴染が無事戻ってきて、さぞかしホッとしたことだろう。闇に消える姿を見て、「よかったな」恋次は、つぶやいてみる。

誰もいない夜道を歩いていた雛森は、角で出会った人影2人に、笑

顔で挨拶した。

「こんばんは、浮竹隊長、京楽隊長」

見れば、こんな夜更けでも死覇装を着込み、隊首羽織をまとったままだ。

2人とも手に、分厚い書類の束を持っていた。

「お仕事中・・・ですか？こんな遅いのに」

「ああ。さっき十番隊に行ってね。仕事を全部譲ってもらってきたよ」

「日番谷くんには？」

他人の仕事を譲り受けさえすれ、人に預けたなんて話を、聞いたことがない。

「無理やりだけどね」

意外そうな雛森の表情に気づいたのか、京楽が付け加えてウィンクした。

「ありがとうございます」

雛森が頭を下げると、浮竹と京楽は目を細めた。

「やっぱり日番谷くんのお姉さん」だよ、君は」

そう言つて。

「仕事がない日番谷くんって、なんか妙だね」

ポリ、と浮竹が頬を指で搔いた。肩を並べて歩きながら、2人が顔を見合わせた。

「髭がない山爺みたいだ」

「眼鏡がない伊勢七緒ちゃんとか？」

「胸がない乱菊ちゃんはどうだ」

京楽の言葉に、2人は思わず、同時にプツと噴出した。

「おおっと」

浮竹が、笑っていた口元を引き寄せた。

「ん？どうしたんだい、浮竹・・・」

ホラ、と目線で浮竹は前を示した。

夜道を歩いていくのは、黄金色の髪を肩に流した、女死神。

いつもピンと背筋を伸ばし、肩で風を切って歩く彼女が、うつむき加減にゆっくりと歩く姿は新鮮だった。

その理由はすぐに分かった。

両腕からあふれるほどの白菊の束を、抱えているからだ。

純白の花弁を見下ろす視線は、赤ん坊を見守る母親のように穏やかだ。

その姿は、ハツとするほど美しく見えた。

乱菊は、白菊を腕いっぱい抱えたまま、夜の丘を登ってゆく。

見下ろす精霊廷は、草冠のもたらした被害の修復のため、多くの死神が夜を徹して働いていた。

室内の燈、屋外にもされた燈が、ちらちらと瞬いて見える。

生きていれば、傷跡は治すことが出来る。

でも……

乱菊は、花束を見下ろし、フツと目を伏せた。

丘の頂上から、月光にチラチラと輝く小川を見下ろした。

そこに先客がいることは、初めからわかっていた。

「……隊長」

輝く銀色の髪が、ふわりと揺れる。翡翠の瞳が、乱菊を捉えた。

日番谷の瞳が、少しだけ寂しそうに細められて、その視線が小川へと戻る。

その川のほとりで激情に駆られ、かつての親友は日番谷に刃を向けた。

そしてこの川を真紅に染め、斃れた。

隠匿され続けた死に、やっと白菊が手向けられる。

「……草冠宗次郎に」

乱菊は、日番谷の隣にしゃがみこみ、白菊の束を流れの上に、捧げ持った。

ハラリ、と落ちたひとひらの花弁が、流れの上に落ち、闇に飲み込まれてゆく。

そのとき、日番谷の肩が、ふと震えた。

日番谷と乱菊が見守る先は、小川の対岸だった。

かすかに金色に光る燐光が、ゆつくりと降りてきていた。

まるで、月の輝きの一部が、この川にやってきたかのように。

―― 違う……

この輝きを、自分は知っている。

「王印……」

それが見えたのは、ほんの一瞬。

ガサツ、と草が動き、啞然としていた2人は、ハッと視線をおろした。

そこにいつしか佇んでいたのは、死覇装をまとった、黒い背中だった。

「くさ……か？」

日番谷の声に振り向けられた茜色の瞳は、生まれたてのように、感情を移してはいない。

「草冠っ！」

白い吐息が、夜空にふわりと、浮かんで消えた。

t h e d i a m o n d d u s t r e b e l l i o n v e r .

f i n .

- - - - -

これで、11話と20話と続いた劇場版BLEACH2 バージョンは終わりです。

草冠を生き返らせてみました（笑

これからもコッソリ、出していく予定。

ではまた、次のテーマでお会いしましょうm┐┐m

21: PERSONA 1 「ひよ里&日番谷」(前書き)

ペルソナ
PERSONA「仮面のこと。または「仮面をかぶって生活する」という言葉のように、周囲と接するときに作り上げる、表層的な性格のこと。

仮面の軍勢×死神 で、何話か続ける予定です。

21: PERSONA 1 「ひよ里&日番谷」

ム力つくもんは、この世にはいっぱいある。

甘ったるい菓子とか。

真子^{シンジ}とか。

「女の子らしくしろ」っていう言葉とか。

でも・・・

「俺か？日番谷冬獅郎だ」

そのガキは、それだけ言うとかん心なくしたように、あさっての方向を見てた。

キザな青い目。銀色の髪。

ウチのほうが百年以上も先輩やのに。

こっちの名前も聞かんって、どんだけウチに興味ないねん。

ホンの、ホンのちょっとウチより身長が高いだけなのに、妙に見下ろすその視線。

「・・・ふふふ」

唐突に笑い出したウチに、日番谷ってガキは気味悪そうな視線をよこした。

みーつけた。

「いけ好かんもの」のストライクゾーンを決めてくれたんは、日番谷冬獅郎って言う死神やった。

—— ああ、いけ好かんわ。

ぶらぶら歩く日番谷の後ろを、ウチはついて歩いとった。

半そでのTシャツに、ちよっとダボダボのジーンズ。

Tシャツからは、男にしては白くて、華奢な腕が見えとる。

—— ああ、イライラする！

男の腕っていうんはなあ、もつと日焼けしとつて、太ないとアカンのや！

汗のひとつも光つとらんとアカンのや！

理不尽な攻撃やって分かつとるけど、いったん思い出すと歯止めがきかん。

——ん？どこ行つた！

タタツ、と走つてその気配を追うと、アイツはオープン・カフェのカウンターにおつた。

なんや、アイスクリーム屋？夏でもないのに、まだ早いやろに。

「お客様、キャラメル・タートル・テンプテーションになります」
ぶつ。

やったら甘そうなアイスを受けとるアイツを見て、ウチは吹きそうになる。

なんちゆうもん頼んどんねん。なにがテンプテーションや。

「恥ずかしくないんかい！」

思わず口に出したとき。

「オイ」

日番谷が、ウチを振り返つた。

「な！なんやねん！・・・偶然やな」

ウチの尾行は、こんな超後輩ごときに見抜かれたりせえへん。

日番谷は、ウチをあきれたような、どうでもええような、なんともム力つく目で眺め回したあと、言つた。

「食わねーのか」

カウンターの向こうを指差す。

お店のお姉さんは、ニコニコしてウチとこいつの顔を見回しとる。

「お友達もどうかしら？」

「誰がお友達やねん！！」

「そんな力ケラも事実じゃないことに、イチイチ反応すんな」

同じのひとつ、と日番谷に、先に頼まれてしまつ。

ああ・・・ウチもテンプテーションかい。

ていうか、カケラも事実やない、て・・・ウチでもそこまで、友達疑惑を粉碎せえへんわ。

「・・・甘い」

「文句言うな」

ホンマに、口から砂糖吐きそうに、甘い。

スプーンをくわえた日番谷が、ふつーの顔で食べてるんが信じられん。

大体ウチ、こんな奴のこと嫌いやのに、なんで二人で歩く羽目になつとんねん。

はあ。

ため息をついたときやつた。

「お客様、どうされました？」

営業スマイルが思い浮かぶような愛想いい声で、どつかの兄ちゃんが言う声が聞こえた。

そっち見たら、中に何か詰め込まれたゴミ袋をもったコンビニ店員がおった。

で、コンビニから出てきたら歳くらいの女の子が、その店員に何か話しかけとった。

「・・・なんや急に足とめて」

日番谷がアイス食べるんをやめて、足を止めた。

視線は、その女の子の方へ向いてた。

「その中、賞味期限切れたお弁当でしょ？あたしに頂戴！ねえ、どうせ捨てるんでしょ？」

「困るなあ、そんなこと言われても・・・これはもう、ゴミなんだよ」

ボサボサにほつれた髪。

シャツはアイロンも当たってへんし、ボタンも止めてへん。家に金がない、ていう訳やないな。ウチはそれを見て思う。

この子に手をかけてくれる大人。

ちゃんと服着て、飯食って、キレイにしなあかんって、気を配ってやる大人が、この子にはおらんのやな。

日番谷は、黙ってその風景を見とる。

その上品な色の瞳には、一体なにが映ってるんやろ。

たぶん、ウチとは違うもんを見とるわ。

その時。ドン、て音に、ウチは視線を戻した。

「しつけない、このガキ。こっち来んな！」

別人みたいに形相を変えた店員が、いきなりその子の肩を拳で突いたんが見えた。

足に力入ってへんのやろ、その子は思い切りよろめいて、後ろに倒れこもうとした。

「あ……」

思わずウチが駆け寄ろうとした時。トン。

軽い音と共に、いきなり後ろに現れた日番谷が、その子の肩を後ろから支えとった。

ていうか、瞬歩ぶつーに使うなや。

「え……」

その子が、ぎよつとして日番谷を見上げる。

日番谷は、その子には目を合わせんと、店員を睨みつけとった。正面きって、思い切り。

店員も同じくらいびっくりした顔しとったけど、やがて無然とした顔でゴミ箱に近寄ると、中身をバン、てぶちまけた。まだ食えるやろって思うような新品の弁当が見えた。

「あ……」

その子が、弁当を見て、迷った顔をする。

日番谷は、無言でその子の手を引いて、道の先へと歩いてった。

「・・・ちよつと！離してよ！」

コンビニからちよつと離れたところで、その子が日番谷の手を振りはらうんが、見えた。

「ちよお待ち。ウチは無関係やって」

きつ！と鋭い視線を向けた子を見て、ウチは手を振る。

「何よ！目つき悪いわね！！」

こりゃー手に負えんタイプのガキや。ウチと日番谷は目を見合わせる。

「お前のことだろ？」

「何いっとなねん、お前よりマシや」

「どつちも悪いわよ！」

ぴしやりと言い放たれて、さすがにウチも日番谷も黙った。

「なんやと、このガキ！助けてやったつつつのに、いい気になりよつて」

お前は何もしてねーだろ・・・て日番谷の声が聞こえたけど、却下。

「こんな夜遅いのに、ほつつき歩きよつて。家どこや！」

「ほつとしてよ、大きなお世話！！」

「やめろよ」

どんだん声がでかなるウチらの会話に、日番谷が割ってはいった。

スッ、とガキの前にかがみこむ。

至近距離から見られたせいか、ガキが体を硬くして身を引いた。

「・・・名前は？」

「・・・美歩^{みほ}」

「そうか。家はどこだ？送っていく」

驚いた。ふつーに会話しとる。

意外と子供好きか？

「・・・まあ、コイツ自身子供やから、子供の気持ちが分かるんかしれん。」

日番谷の質問に、美歩、と名乗ったガキは、ぎゅっと唇をかみ締めた。

「家なんかないもん」

「あ？じゃあ、親は？」

黙って、首を振る。ウチはガン、と後ろから日番谷の頭をはたいた。「ってーな！何すんだよ、てめー」

「虐待されとんじゃ、親に。世の中、親が絶対子供を可愛がるなんて、大間違いやで。」

現世に来て百年、こんなガキ腐るほど見たわ」

「ママは、あたしなんかゴハン作りたくないって。イヤイヤ作ってほしくないもん」

あーあ・・・泣いてもた。

「・・・親はどこにおるんや」

指で目をこすってるガキを、ウチは見下ろした。

さすがにこんな見せられたら、ハラも立たへん。

「お父さんは死んじゃったけど。お母さんはいるよ。」

でも・・・別の男のヒトといえるから、今更あたしを・・・」

押し付けられても、困るってわけやな。

美歩が言えなかった言葉の続きが、カンタンに思い浮かぶなんて、ウチも擦れたもんや。

日番谷には、わからんかしれんな・・・そう思った。

コイツも、ウチと同じ、流魂街の出身や。

流魂街は、血縁も何も無い赤の他人が、生き抜くために身を寄せ合う場所や。

うまくいかんかったり、裏切られたりしたら、どうしても、こう思ってしまった。

もしも血がつながってたら、もつと分かりあえたんちゃうかって。無いものねだり、っていうのかな。

求めてもムダやってわかってる分なおさら、血縁への憧れは、強い。そやから。

血のつながりっていうのが、時として赤の他人よりも冷たいって知って、ウチも初めは正直、傷つきました。

長い間、鍵が見つからんと開けられなかった宝箱の中身が、空やっ
たみたいだ。

日番谷は、しばらく黙ったが、ゆっくり口を開いた。

「ウチへ帰れ」

「空気読まんかい！」

その頭を、ウチは再びどついた。

教科書通りのことしか、その真つ白いアタマの中には入つとらんのかい。

美歩は、首を振る。首を振ったとき、涙がぽろぽろと頬を伝った。

「ダメ。それにあたし、待ってるの。パパ、ここにいるもの」

その時。

おそらく、文句を言おうとウチを振り返りかけた日番谷が、すばやく視線を美歩に向けた。

なんや？

ウチも気づいた。

美歩の近く……すぐ後ろの壁が、歪んだみたいに見えた。

そして、そこから突き出したんは……

美歩の頭くらいの直径がある、異常なサイズの灰色の指。

「虚か！」

日番谷が、それにむかつて手のひらを向けた。

死神化しとらんでも隊長や、これくらいの虚、どってことないやろ。でも。日番谷の動きは、途中で止まった。

振り返った美歩が、

「パパ！」

背後に現れた、１メートルほどの灰色の顔を持つ虚に向かって、手を伸ばしたからや。

「・・・バカ！！」

ウチが叫んだときにはもう、虚の爪は、美歩の眼前まで届いてた。

「ちっ！」

日番谷が叫ぶと、美歩の腕をぐいと引き、ウチに向かって投げつけた。

「ガキが！」

虚は、憤怒の形相を日番谷に向けると・・・その馬鹿でかい拳で、日番谷の腹を殴りつけた。

「ぐっ・・・！」

「日番谷！」

死神化したらんその体の強度は、普通の人間とあんまり変わらへん。虚の攻撃なんか、受け止められるわけあらへん・・・その体が後ろの壁にぶちあたって、とまった。

ズル・・・と下にくず折れた日番谷に、意識は無い。ぶつかっただころの壁が、血で赤く染まった。

「この、根性なしがあー！」

こんなんで氣い失いおつて。最近の死神は鍛え方が足りんのちゃうか？

あたしはすばやく死神化し、斬魂刀を腰から引き抜いた。

「コラ、美歩！お前、日番谷のところにさがつとれ！ウチが戦ったる」
ギリリと光った刀を見て、ヒツと美歩が息を呑んだ。

ウチは、その切っ先を、虚に向ける。

こいつは美歩の父親の虚。やとすると、狙うんは・・・
「やめてー！！」

その瞬間、美歩がウチの懷に飛び込んできた。

慌てて刀を引いたウチに背中を向けて、美歩は大声で言い放った。

「お願い！あたしを、パパのところにつれて行って……」

それに答えるように、虚がその爪を美歩に向ける。

「アホ！どかんか！死にたいんかい！」

ウチは、その小さな肩を、後ろに押しやった。

お前は、わかつとらん。

その虚がお前を狙うんは、父親として娘の頼みを聞こうとしてるから……と、違うんや。

虚が、その失った心の穴を埋めるため、求めるんは「最愛の者の魂」。

その本能に従ってるだけなんや。

「命なんて、あたしはいらない！」

ウチの手を烈しく振りはらった美歩は、そう言い放った。

そして、ガキながら、燃えるような本気の目でウチを見据えた。

「あたしは、この世で一人なの。こんなにたくさんヒトがいたって、たった一人なの！」

それなら、鬼でもパパと一緒にいたい！」

「……美歩」

「行かせて！」

正直言って、気圧された。

ウチの百分の一も生きてへんガキやのに。

こんな小さな体の中に、そんなことを言わなアカンほどの、どれだけの悲しい思いを詰め込んできた？

次の行動を見失って、立ち尽くしたウチに、虚が迫った。

灰色の巨大な顔。牙を剥いた口。逆立った髪。もう、片鱗も人間を残してない。

その涎を垂れ流した口が、かぱりと開かれた。

「むすめを、こっちへよこせ」

美歩が、ゆつくりと前に進み出る。そして、大きく手を指し伸ばした。

虚と化した父親に向かって。

「・・・いいよ」

諦めたんか。それとも、本当にうれしいんか。

こんなバケモンでも、その目には父親に見えるんか。それを見守るウチの手から、力が抜けた。

そうかもしれない。そう思ったからや。

心から、父親は娘を連れて行こうとしてる。たとえ、動機がなんであらうと。

そして、娘は父親と一緒にいたいと、強く強く願っとなる。死んでもいいくらいに。

二人がそう望むなら、その邪魔をする権利、ウチにあるんやろか。

「一緒に行こう、美歩！」

言葉とは裏腹に、バカでかい口が、美歩に向かって開かれる。

ウチは、それが分かってても、とっさに動けなかった。

「バカヤロ・・・！」

気がついたら、叫んどった。

動かん自分にか、自分の娘を殺そうとする父親にか、それを涙を見せながらも受け入れる娘にか。

その時、黒い影が、疾風みたいにウチの前を通り抜けた。

ガキン！！

牙と刃が打ち合う音が、夜の通りに響いた。

「日番谷！」

日番谷の小さい体が、虚と美歩の間に入り込んだ。

虚の牙は、日番谷が振りかざした刀と真っ向からぶつかり合って、止まってた。

「・・・その傷で、無茶なことを・・・！」

二ヤ、と虚があざ笑うのが分かった。そのまま、ギリ・・・と力を入れてくる。

あの出血や、肋骨の一本くらい、イッてしもとるかもしれん。

激痛なはずなのに。日番谷は、表情も変えなかった。

「この子を連れて行くな」

「いいの！本当に、いいから！」

美歩がその肩に手をやっても、日番谷は目もむけなかった。

「ダメだ」

日番谷の返事は、短かった。

「お前は、現世で生きるんだ。命がある限り」

命、は。失ってから初めて、どれだけ大切か分かる。

現世で死後死神になった日番谷も、ウチも・・・そして、この虚もそれを身にしてみて分かつとる一人や。

断固としたその言葉を聞いた虚の目が、一瞬ひるんだのをウチは捕らえた。

「ちっ！」

牙と刃が、火花を散らしてすれ違う。虚は、5メートルほど背後に飛び下がった。

「やめて！」

美歩の涙声に、日番谷は視線を落とした。

「下がってろ」

そして、唇をかんで、刀の柄をぎゅっと握り締めたんが、見守つてるウチには分かった。

「・・・」

ウチは黙って、瞬歩で美歩の後ろに近づいた。

そして、その両肩を捕らえて・・・虚の前に、突き出した。

振り向いた日番谷が、あわてたように叫ぶ。

「やめろ！何やってんだ！」

「いいから黙つときイ！」

ウチは思い切り声にドスを聞かせて、怒鳴った。さすがに日番谷が黙り込む。

「ホラ。どうしても連れて行きたいんやったら、やればよいやろ」
ビクリ、と美歩の肩が動いた。虚が、ゆっくりと、美歩の方へ歩み寄る。

「パ、パ」

50センチほどまで近づいた虚が、その顔をゆっくりと、美歩に近づける。

「・・・憎いやろ。苦しいやろ。虚つて、そういうもんや。

それでも、絶対にやったらあかんことが何かも、分からんならな」

ウチは、虚の顔を睨んで、そういった。

この虚は、日番谷の言葉に反応して、ためらった。

考える心が、あるってことや。

もちろん、こんなんは賭けや。

日番谷が、刀の柄に手をやったまま、虚の次の動きに注意を凝らす。

あたしも、両手を美歩の肩に置いたままやから、無防備や。

美歩にかかってこられたら、こっちもタダじゃすまんやろ。

十秒か？一分か？それよりも、長い時間はわからん。

気づけば、冷や汗が頬を流れ伝ってた。

「・・・誰かくる」

日番谷が、低い声でつぶやいた。

カツ、カツ、とヒールがアスファルトを叩く音が、近づいてくる。

—— どうする？

ウチと日番谷が、顔を見合わせたとき。

「美歩！」

ハッ、とその場の全員が、声のしたほうを見やった。
びくり、と虚がその全身を揺らす。

「ママ!？」

それは、キャリアウーマンって感じのジャケットとタイトスカートに身を包んだ、30代くらいの女やった。

キレイに着飾って、首にも耳にもアクセサリーが光つとる。

「なに・・・あなたたち」

女の目が、ウチと日番谷の間を彷徨う。

虚は、見えとらんのやな。まあ、普通の人間に虚は見えんのが普通やけど。

「美・歩」

牙をむき出した虚が、つぶやいた。

その視線は美歩じゃなく、昔妻やった女を見つめとった。

「いい名前、だ」

スッ、と虚の頬を、涙が伝った。

その涙は、人間が流すのと同じ。キレイで透明やった。

「・・・ホラ。やれや」

ウチは、日番谷にそう促す。

額いた日番谷が、刀を抜き放ち、その柄尻を虚の額に、そっと押し当てた。

それは、魂葬の儀式。

「パパ!!」

美歩が声を上げて、前へと踏み出す。

その姿を、虚は・・・いや、父親は、優しい目で見下ろした。

「すまなかった、なあ」

ふわり、とその姿が宙に溶け・・・美歩はひとり取り残された。

「・・・」

気が抜けたような、呆然としたような、そんな沈黙があたりを覆う。

でも、そんな沈黙は、

「あなた達、何ですその格好！美歩と何の関係があるんですっ！！」
固い女の声に、かき消された。

「・・・」

今度は、うちと日番谷が気まずい視線を交わす方やった。

黒い着物着て、刀引っさげて、夜中に何やつとるって言われても困る。

ズカズカと女は歩いてくると、美歩の手をぐい、と引っ張った。

「夜中に歩いて！どこまで面倒かけさすの、アンタは！」

「いったい誰のせいで、夜中に家出しなきゃいけなかったと思ってんだ！」

ズイ、と日番谷が足を踏み出した。

珍しい、本気で怒つとる声や。それを聞いた女は、その怒りに少しひるんだ顔をした。

「な、なによ！子供の癖に、警察呼ぶわよ！」

美歩のクチ悪いんは、絶対母親の影響やな。

ウチはため息をついて、女に近寄った。

「ウチらな、美歩のクラスメートやねん。」

学芸会の練習しとって、面倒くさいからそのまま帰ってきたんや」

クチから出任せ。あきれたように日番谷がウチを見る視線を感じる。

でも、母親は一応、信じたらしかった。

「・・・紛らわしい格好するんじゃないの。早く家に帰りなさい」

不本意やけど、外見が子供で助かった。

「こいつは、まだ自分で居場所を見つけれない、ガキなんだ。

自分で居場所を見つけれられるようになるまでは、アンタが作ってやらなきゃいけないんじゃないのか」

日番谷が、ぼん、と美歩の肩に手をやって、母親のほうへ歩かせた。母親のほうは、その言葉に、少しいぶかしげに、眉をひそめた。

その微妙な表情が、もちろん似てもつかん、さっきの虚を思い出させた。

—— この女も鬼って訳ちゃう。苦しんどるんやろな、きつと。

「・・・ママ」

美歩は、うつむいたまま母親のどこまで行くと、ためらいながら、そっと母親の手をとった。

「ごめんね。毎日仕事で遅いのに」

きつと、女として新しい夫とうまくやっていく時間とか。

母親として、美歩と過ごす時間とか。

そういうのを捻出するには、この女は時間がなさすぎるんかもしれないな。

母親は、美歩の言葉に、絶句したみたいやった。

無視しとった子に、氣遣われたらそりや言葉もないやろ。

その表情が、この女にもまた、考える心があるんやってことを思わせた。

母親は、黙ってかがみこむと、美歩の服の外れたボタンを、ゆつくりと留めた。

そして、手を取ったまま、無言のまま、ウチらに背中を向けた。

「—— な、なあ」

ふと、思い出したことがあった。

—— いい名前、だ。

さっき魂葬した父親が、そんなことを言ってた。

「美歩、てなんでつけたんや？」

振り返った母親は、ちよつとだけ考えて・・・そして、微笑んだ。

「例え険しい道でも、立派に歩いて、自分の足で生きてゆけるように。」

だから『美歩』よ。元夫と考えて決めたの」
ああ。

どんな人間にでも、人生があるんやな。

手をつなぎあった一对の母子は、なんだかとても、普通の家族に見えた。

振り向くと、日番谷は、痛そうに顔をしかめていたのを慌てて戻した。

「お前、いつつも、魂葬するんにそこまで手間かけとるんか？」

信じられんわ。隊長やったら、ソウル・ソサエティ全部が相手やないんか」

「一人ひとりを適当にやるってことは、全員を護らないのと同じことだ」

日番谷はそういつて、元の姿に戻った。

全く、融通のきかん奴やな。当たり前のことしか言わん。でもな。

「お前、なんで、最後に美歩を父親に突き出した？こうなることが分かってたのか？」

初めからわかってたわけや無い。

与えられた生を、精一杯生きる。

当たり前のことを、当たり前前みたいに言うこいつを見ると、ちょっと、信じてみる気になっただけや。

百年現世で暮らすうちに、被った擦れっからしの仮面を、ちょっと取ってみる気になっただけ。

「ホラ行くで、超後輩」

ウチは、訝しげに眉をひそめた日番谷に、手を差し出した。

「家まで連れて帰ったるわ」

「俺はガキじゃねーぞ！」

狼狽した日番谷の声がおかしくて。ウチは大声で笑った。

- - - - -

ちびつながりで書いてみました。

ちなみに、「キャラメル・タートル・テンプレーション」は
コールドストーンのメニューです。

22: PERSONA 2 「平子&ギン」

「ちょっと、何すんのよ!」

まだあどけない少女の声が響き、平子真二はフツと顔を上げた。

「ガキのくせに、いい体してやがんぜ、こいつ!」

その野卑な男の声が終わる前に、ふう、とため息をつく。

「ちょっと待ったときや、お前ら」

「平子隊長?」

急に立ち上がり、隊首羽織を翻して背中を向けた平子に、隊士たちが声を上げた。

しかしそれに構わず、古びた通りの角を曲がる。

—— 埃っぽい街やのオ・・・流魂街やし、精霊庭みたいに小奇麗にはいかんやろけど・・・

それにしても、街は古びている。朽ちている、といってもいいくらいだ。

皆から見捨てられ、諦められ、ただ終わりを待っている。

倒れかけた家が続く町並みは、瀕死の老人を思わせた。

「コラお前ら、何しとる!」

角を曲がったところで、男に取り囲まれた、小さな少女が見えた。ちつ、と舌打ちし、わざとらしく刀を抜いてみせる。

「『今宵の斬魂刀は、血に飢えておるわ』・・・なんてな」

ふざけて見せても、それは隊長の抜く刃。

一瞬の間に磁場のように広がった圧力に、男達が押されるように背後に下がった。

「この死神ヤローが!」

捨て台詞を残して走り去ってゆく男達に、再びため息が出た。

—— アホくさ。

その場から踵を返す。

こちらにも任務を控えた身なのだ。男達の色狂に付き合っている暇などない。

「待ちなさいよ！」

その時、後ろから凜とした声が響き、平子は思わず振り向いた。

「なんやお前、おったんか」

一緒に逃げるか、腰を抜かすかと思っていた少女は、その場に何事もなかったかのように突っ立っていた。

「・・・こりや、肝の据わった嬢ちゃんや」

「嬢ちゃん、じゃなくて松本乱菊！」

子供をあやすような口調にムツとしたのだろう。

言い返したその声音には、恐れている様子など全くなかった。

—— こりや・・・将来いい女になるわ。

松本乱菊、と名乗った少女を一瞥して、平子は思う。

顔も体も泥に汚れ、あちこちつぎはぎを当てた服を着ているが、男達が目をつけるのもわかる気がした。

汚れても分かる白い肌。黄金色の髪。青色の瞳。

着物からは、子供にしては随分豊かな胸がのぞいている。

—— ひよ里にも、見習わせたいわ。

そう思った時。

「なにやつとんねん、真二！」

全く何の前触れも遠慮もなく、小さな草履の一撃が、平子の頭を直撃した。

「お前こそ、なんでいきなり蹴るんや！」

スタツ、と飛び降りたのは、そばかすが顔に散った、目つきのきつい少女。

身長だけ取れば、乱菊と同じくらいに見える。

「なんとなく腹立った」

—— まさか、今思ったことバレたんちゃうやろな。

頭の泥を払いながら、平子はひよ里の仏頂面を見下ろした。

「ていうか、なんでついて来るんや。十二番隊副隊長やろ、お前は！」

「ええやんか、ウチの勝手やろ！十二番隊おつたらイライラするんや！」

その時やつと、ひよ里は自分を見つめる乱菊の存在に気づいた。

「何や、この女」

ひよ里は、乱菊を頭の上からつま先まで、じろじろと無遠慮に見た。乱菊の方も気後れするでもなく、同じくひよ里を眺めている。

「お前、名前は？」

「松本乱菊」

「ハッ、ガキの癖に、菊やなんて。辛気臭いけどイロっぱい名前やんか。ウチなんかな・・・」

「それはもう良いねん」

平子は、ひよ里の頭を上からガシッと押さえた。

どうせ、自分の苗字は猿だの柿だの言うに決まっている。

「乱菊ってゆーたな。何しに来たんかしらんけど、ここはアカン。これから戦場になるでな。」

安全なところに逃げときィ」

見たところ、遠くから来た風には見えない。

この近隣に住んでいるなら、この場所がどれほど危険かということ、分らないはずがないのに。

なぜ、こんなところを無防備にもウロウロしているのか・・・

「分かった。男がらみやな」

唐突にひよ里が口を挟んだ。

「何でお前、そう毎回毎回考えとること読むねん！」

「何のことや？そうやろ？」

このひよ里、自分は色事には全く関わらない癖に、他人事となると

妙に聡いのだ。

「・・・探してるヒトがいるの。いつも居なくなるから、いつも探してるの」

「そいつはダメ男や」

ひよ里は分かっていることを、あからさまに言つてトドメを差した。しかし乱菊は傷ついたようでも腹を立てたようでもなく、ただ、首を振った。

――道に迷つた子みたいやな・・・

それは、男達に囲まれても見せなかった、今にも泣きそうな表情で。「分かった。探したるさかい。どんな奴や？」

ハッ、と乱菊が顔を上げる。

「なんで、ンなことせな・・・むぐっ！」

余計なことを言いそうになつたひよ里の顔面を手のひらで押さえた、その時。

「平子隊長！賊が現れました！ここから西へ10キロ地点！第一陣は既に向かいました！」

角を曲がつて現れた隊士が、平子を見るなり大声を出した。

「そんな大声ださんでも、聞こえとるわ・・・乱菊、安全なところで待つときや」

「あ・・・」

乱菊が手をのばした時には、平子は既に身を翻していた。

- - - - -

「な、なんや、これは・・・」

薄闇が広がりだした原野。平子のすぐ後ろについていたひよ里が、それだけ言つて言葉を切った。

「巴！垣田！富岡・・・！」

二人に追いついた隊士たちが、その場を見下ろすなり、悲鳴のよう

な声を上げた。

その地に満ちるのは、濃厚な血の匂い。そして、瀕死の者の呻き。それも、数人、というレベルではない。第一陣のほぼ全員が、その地に伏していた。

「平子隊長！何とかありませんか！」

倒れた隊士を抱き起こした者が、スッと背後でかがみこんだ平子を振り返る。

「・・・」

平子は、その腹の真ん中に、黒々とあいた巨大な傷跡を見下ろした。

「・・・止め、刺したりイ」

「そんな・・・平子隊長！」

「このままじゃ苦しんで死ぬだけや、て言ってるんや！
こんな傷、四番隊でもどうにもならん！」

声を荒げ、平子は言い放つと、ギリ、と奥歯を噛み締めた。

「・・・真二・・・」

断末魔の悲鳴があちこちから聞こえるなか、ひよ里が平子を見上げた。

「絶対に助からん傷を負わせて、置いていくなんてな。外道どもが・・・」

「ウチも手伝うてやる。仇討ってやらなあかん」

うう、とうめき声にも似た、くぐもった嗚咽が聞こえる。

ひよ里が、それを見て、悲しげに視線を落とした。

死神は役割上、戦いの最中に命を落とすことも多い。

いや、死神の死因のほぼ全てが、戦闘中の死亡といってもいいくらいだ。

しかし。その中で最も辛いのが、致命傷を負った仲間止めを刺すことだった。

「そりゃ助かるわ。でもお前はさがつとき、ひよ里」

返した平子の声は乾いていた。

「賊っていうから。何人もおるんかと思つとつた。が・・・たつた一人とはな」

「え？」

ひよ里が、顔を上げる。

そして、その少年は・・・闇の向こうから、ゆっくりとその姿を現した。

輝き始めた月光に、銀色に輝く髪。

そして、肩に担いだ物に、隊士たちが息を飲む。

それは、巨大な弧を描く、大きな鎖鎌だった。

月光にキラツときらめいたとき、その白刃に血が伝うのが見えた。

「子供を殺す趣味はないんやけどな。お前は、殺すで」

平子が斬魂刀を抜き放ち、一歩前に出た。
手を抜くつもりなど、微塵もなかった。

――タダ者やない。このガキ・・・

たった一人で、護廷十三隊の死神を殺すなどとは、尋常ではない。
それに、この十数人が殺されたのは、平子たちが駆けつける前まで、10分はなかったはずなのだ。

少年の目元は、闇に隠れて見えない。

「ちょっとイタズラが過ぎたんちゃう？坊」

「市丸ギンや」

その口元が、亀裂のような微笑を形作るのが見えた。

――

――何や、気味悪いガキやな・・・

平子とギンと名乗った少年が向き合つてのを見ながら、ひよ里は二の腕を押さえた。

薄汚れた服を着た、流魂街にはよくいる、普通の子供のはず。

それなのに・・・その姿を見ていると、綿に水が染み入るように、ゾクゾクと冷たいものがこみ上げて来るような気がした。

「なんで。こんな次々と殺したんや？」

その問いに、ギンは笑みを深くした。愉しそうとさえ言える声音で、返す。

「何いつてるん。殺したんはアンタらやろ？」

「きつ・・・貴様!!」

涙を流していた隊士の一人が、斬魂刀に手をかける。

「あかんっ！押さえるー」

平子が鋭く口を挟むよりも速く。一足飛びでギンに斬りつけた！

その動きに、ギンは一瞬、動きが取れないように見えた。しかし。

その切っ先が額に届く、ほんの直前。

華奢な体が、刹那の間に、視界から途切れた。

「なっ・・・」

ひよ里が身を乗り出す。

隊士の両足が、同時に血を吹いた。

—— そんな・・・鎌が振り下ろされるのも見えなかった・・・！

どう、と隊士の巨体が、地面にくず折れる。

その胸を、少年が力を入れて踏みつけた。

「不思議でたまらんことがあるんやけど」

身を起こそうとしても、両足が全く使い物にならない。

その首元に、すかさず鎌が突きつけられた。

「止めい！」

平子が一步、前に出るのをからかうような目で見つめる。

—— 人質にでも取る気か？

それでも、この隊士のために他の者達を犠牲にするわけにはいかない。

分かっていても、平静になれるはずがない。

齒噛みした平子は、ギンの観察するような瞳に気づいた。

「アンタ、悲しいんか？仲間殺されて」

ギンは、自分が刃を突きつけた隊士を見下ろした。

「貴様が憎いだけだ！殺してやりたいくらいにな！」

ふうん、とギンは鼻から抜けるような声を漏らした。

隊士は、苦痛に顔をゆがめながらも、平子に目をやった。

「隊長！私にかまわずに、このガキを・・・！」

「人質、なんて意味わからんこと、せんよ」

ギンの、底冷えがするような声が響いた。

「人のために自分が損することなんか、するはずないやん」

「よせ！」

平子が駆けた。

しかしそれよりも先に、やけにゆっくりと、ギンが鎌を隊士に食い込ませた。

少しずつ侵入してゆく刃。

隊士の喉から漏れる絶叫、ついで空気が抜けるような音。痙攣する指。

そして一瞬置いて、おびただしい血が吹き出した。

それはまるでカーテンのように、ギンと平子たちの間を遮る。

「なんで。人を殺したらあかんの？」

血の壁の向こうから現れたのは、無邪気な、とさえ言える笑顔。

「こんなに、うれしいのに」

チラリ、と驚くほど紅い瞳が見えた。

その瞬間、心の深遠を覗き込まれたような気がして・・・平子は思わず身を引いた。

——アカン・・・

平子は、思わず皆から遮るように、袖を横にかざした。

「アンタらも楽しいと思うやろ？虚を殺す瞬間とか。ヒトも殺したことあるんちゃう？」

面白いつて、思ったんやろ・・・？ほんまは」
このガキは、人を呑む蛇や。

誰にでも、善と悪の側面はある。

誰かが死んで悲しいと思う反面、死んでくれてラッキーや、くらいに思う自分も居る。

でも、ヒトは善を選び取るように出来てるもんや。

この少年だけは・・・違う。

「お前は、ホンマにあかんわ」

ゆつくりと、平子はギンに歩み寄ってゆく。

「お前は、自分が闇におるだけやなくて・・・周りを同じとこに引きずり込む。

おったらあかんのや、そんな奴は」

次の瞬間、平子の斬魂刀が閃いた。

- - - - -

「・・・真二。止め、差したりイ。苦しめたらあかん」

その、30分後。ひよ里が、ゆつくりと平子の背中に声をかけた。

「優しい・・・んやなあ。ボクにまで」

闇に転がった物体にしか見えなかった「それ」が、言葉を発する。

ごほっ、と咳き込むと同時に、液体が地面にこぼれる音がした。

—— 内臓をやられてるな。

もう、二度と立ち上がることはできまい。

「勘違いすんなや！」

ひよ里が声を張り上げた。

「真二のためや。止めも刺さんといつまでも苦しめる、お前のような奴にならんためや！」

ふっ、とギンが笑ったような声が聞こえた。

それきり、あたりはしんと静まり返る。

—— たいしたガキやわ、オマエは。

平子は、気を失ったギンの真上に立ち、その姿を見下ろした。目を閉じているその姿は、やはり普通の子供にしかみえない。

しかし、彼が見せた力は、子供というには、明らかに異様なものだった。

その力は、優に席官レベルに達しているだろう。

隊長の自分でなければ、カスリ傷程度では済まなかったはずだ。

今回は、難なく勝てた。

しかし次回は、勝てるかどうか、分からない。

「惜しいわ。心根さえまっすぐなら、良い死神になれたのにな」

刀を、その首に突きつける。子供に手をかけるのは、初めてだった。

—— 堪忍な。

心中で、つぶやいた。

その時。

「……く……」

かすかな声が闇に溶けた。

「乱菊」

その声は、まるで、道に迷った子供のようで。

平子は、見知らぬ者を見るような瞳を、ギンに向けたまま固まった。

「えっ？真二・・・？」

いきなり身を翻した平子に、ひよ里と隊士たちはあっけに取られた。
「もう死んどった」

それだけを言い残して、どンドン街のほうへと帰っていく背中を見て、

残された者たちは顔を見合わせた。

- - - - -

今になると、思う。

やっぱりあの時、オマエを殺しておくべきやったと。

オマエは、心の中にバケモノを飼つとる。

それを殺すには、オマエも殺すしかないなら、やるしかなかったのに。

空座町の上空で微笑む、そいつを見上げた。

腰くらいまでしかなかった少年は、ワシよりも今や背丈がある。

ワシを超えようっていうんか、市丸ギン。

空中で、目が合う。

その口元が、亀裂のように、微笑む。

既視感で、頭がぐらりとした。

23:milk tea (前書き)

「BLEACH in FLAME」晩冬の踊り娘」が内容の下敷きになっています。

23 : m i l k t e a

m i l k t e a

カリリ。

皮のまま齧った赤い林檎^{リンゴ}が、口の中でかすかな音を立てた。

それはまだ酸っぱくて、みずみずしい驚きと共に、あたしの喉を滑り落ちてゆく。

腰掛けた、年季の入った椅子が、あたしの動きと一緒に、ギシリと音を立てた。

あたしは壁際に座り、ボンヤリと外を眺める。

外に見える通りには月光が落ちていて、にぎやかに行きかう人々の声でいっぱいだ。

アゲハ
「揚羽」

その声に、あたしは耳を澄ます。

「揚羽はどこ行った！あの踊り、また拝みてえなあ。冥土の土産にもつてくのに」

「冥土の土産って、お前はもう死んでるじゃねえか」

アハハ、と起こったのは屈託のない笑い声。

そう。ここは、あの世の底。死んだものがたどり着く場所。

これ以上底を知らない底は、意外とアツケラカンとして楽しい。

父様。母様。

あたしは、踊り続けてるよ。

みんなの日常に、ほんのちよつとだけ笑いを乗せて。

口笛みたいなもんだと思う、あたしの踊りは。
軽くて、皆を浮き浮きさせて、そして吹き抜けていく。

でも。

あたしは？

あたしは、どこへ行くの？

部屋の中で彼らを見下ろすあたしの姿は、月の影になって、見えな
い。

降り注ぐ月光は、銀に、時には蒼に色を変え、あたしの上に降り注
ぐ。

あたしは瞳を閉じて、それを受け止めようとする。

取りとめの無い、思いに甘えるのは、そんな時。

どこにもたどり着けないと分かっている、甘い、懐かしい、切ない
思い。

揚羽。

そう言つて、あたしを抱きしめて引き戻した、強い腕を思い出す。
あの翡翠色の瞳は、今誰を見つめているのかな。誰を、思っている
のかな。

それが、あたしじゃないのは、分かつてる。

でも、あなたがどこかで、凜と立っていると、信じてる。

「ああ・・・」

勝手につぶやいた自分の声に、思いがけなく気持ちがあふれていて、
あたしはびっくりした。

会いたいと、この胸の奥が、ずっとずっと叫んでいるのだ。

「・・・ねえ」

雛森は、屋根の上に声をかけた。

「ねえ。日番谷くん。いつまでそんなところにいるの？」

「うるせえ」

「ねえってば」

「くんな」

何度呼びかけても、返ってくるのはぶっきらぼうな言葉。

まるで、すねたみたいな、ふくれてるみたいな、イライラを隠しもしない子供っぽい声。

でもね。

いつもカッコつけて、大人ぶってる日番谷くんが、子供っぽい声で話すときは。

いつになく心から、何かを想つてるときだと、あたしは知ってる。

しんしんと降り積もる、月光。

それが、日番谷くんに何を想わせるのか、あたしには分からない。でも、その切ない思いが、あたしの中にまで染みとおってくる気がして。

あたしはそっと、胸を押さえた。

23:milk tea (後書き)

読んで頂いた皆さま、ありがとうございましたm(____)m
増殖しすぎた小説を見やすくするため、HPを新しくつくりました。
今後の短編小説の更新は、こちらでしていきます。
よろしければこちらもどうぞ^^

<http://wpapyrus.nobody.jp/>

h a l c y o n d a y s

と、いうわけで、黒崎一護は黄昏の迫る雑踏へと踏み出した。

色の趣味が良い。重厚でどこかレトロな灰色のジャケットの下に、女が好むような思いがけない、明るい色のシャツを着ているのが妙に様になっていた。嫌味でなくさらりと身につけた青っぱいネクタイがジャケットから見え隠れしている。ざっ、ざっ、と革靴を鳴らしながら、息も切らず一息に、長い坂道をあがってゆく。空座町全体を見渡せる小高い丘にある、小さな喫茶店。人通りも多い場所にあるその店が、一護のお気に入りだった。ガラスの嵌ったドアに手をかける直前、一護はキツと振り返り、黄昏が下りてくる、街の景色を一望した。この掌に収まりそうなほど小さな景色の中に、家族がいる。きつと今頃、急になくなった自分を探しているだろう家族が。

「おにいちゃん！ おにいちゃん？ ドコ行っちゃったのかなあ？
ねえ夏梨ちゃん！」

一護の部屋のドアをそつと開けて、中を覗き込んだ遊子はあるという間に心配そうな顔になった。薄暗くなった部屋に足を踏み入れると、開きっぱなしになっていたカーテンを閉める。もともと物の少ないその部屋は、部屋の主がいなければますます無機質に見える。「大丈夫だって。ちょっと外出ただけだろ？　すぐに戻ってくるって」

その声に振り返ると、夏梨がドアの枠に手をかけて、遊子をまっすぐに見ていた。

「うん、でも……」

表情を曇らせた遊子を見て、夏梨は軽いため息をついた。これは一兄が悪い、そう思いながら。

一護は最近、家を空けることが多くなった。しかも、数時間どころでなく、何日も何日も連絡さえつかないことがある。それなのに、ある日何事もなかったかのようにひょいと帰ってきたりする。どこに行っていたのか、何をしていたのか。それを尋ねても、片っ端からはぐらかしてしまうのだから始末が悪い。一護の死神姿を見ている夏梨には、大体の事情は察しがついているのだが……何も分からない遊子は、不安が増して当然だろう。

「どうしよう。またしばらく戻ってこなかったりしたら……」

案の定遊子はそう言うのと、心細そうな表情でうつむいてしまった。

「……今日はそういうんじゃないよ。すぐ戻ってくるって」

「なんで分かるの？」

問われて、一瞬夏梨は言葉を詰まらせる。

「……勘、だけどさ」

空とぼけた表情でそう言うことしかできない。「危険な霊圧を周囲に感じないから」なんて遊子に言っても、しかたない。

「晩ごはん、までには帰ってくるかな」

「帰ってくるって」

そう請け合いながら廊下へ戻ろうとした時、背後に佇んでいた大きな人影に、夏梨は鼻先から突っ込んだ。

「おお夏梨、抱きつきたいなら思い切りおいで!!」

「邪魔だ、親父」

いつから立ってたんだこの親父……と思いながら、夏梨はにべもなく言い放った。

「お父さん、お兄ちゃんが!」

「んー?」

泣きそうな顔で走り寄ってきた遊子の頭に、一心は大きな掌を置いた。遊子の言葉に言葉をとぎらせ、軽く視線を泳がせる。窓の向こうに黄昏に眼をやって、ぽつりと言った。

「大丈夫、すぐに戻ってくるさ」

その声音に、夏梨は思わず父親の顔を見上げた。きつぱりした皺が

いくつか走った一心の表情は、いつになく柔らかい。自分や遊子には見せない顔だった。どこか温かく、どこか懐かしそう。じゃ、その視線の先は……そう思った時、一心はいつもの笑みを浮かべて二人を見下ろした。

「じゃ、今日は久しぶりに焼肉にするか！ 一護のヤツ、戻ってこなかったら悔しがるぞ！」

「ホントか？」

「じゃああたし、肉買ってくるね！」

そう言った遊子は、弾んだ声で付け足した。

「お兄ちゃんの分も、いっぱい買ってこなくちゃ」

カラン、とドアが開き、カウンターから馴染みの声が迎えた。

「おお、一護くん！ 来てくれたのか、久しぶりだな」

「ういつす、マスター」

獵師のように日焼けした顔を人懐こくほころばせた初老の男が、一護を見て明るい声を上げた。一護は軽く手を上げて、それに応える。

「いつもの奴でいいかい？ それをホットで」

「ああ。オープン席でもいいか？」

クイツ、と立てた親指を外に向け、一護がマスターに問うた。マスターは聞くなり苦笑する。無理もない、もう季節は十一月なのだ。夕暮れ時となると空気はグツと冷え込んでくる。

「この寒いのに、もうやってないよ。でもまあ、椅子とテーブルは出しっぱなしになってるし好きな座りだよ」

「サンキュー」

コポコポ……と音を立てながら、茶色の薫り高い液体が宙を踊る。無心な表情でそれを見つめる一護の視線を感じる。マスターはカップを取り出しながら問う。

「どうしたんだい？ なにか悩みでも？」

「えっ？ いや、そんなんじゃないよ」

「悩めるなんて、結構じゃないか」

なみなみとコーヒーを注いだマグカップをカウンターに滑らせ、マスターは微笑んだ。

「物思いはコーヒーを美味しくする。そう思わないか？」

「そんな渋いこと、言えるようになりたいっス」

一護は、彼には珍しく、おどけたように肩をすくめた。おそらく、いつもは明るい真っ直ぐな少年なのだろう、とマスターは思う。ただここへやってくる時の一護は、きつと家族や友人には見せぬナイーブな表情をしている。いい家族、いい友人、いい生徒を演じるにはそれなりの努力が必要だ。こうありたいと思う自分と、実際の自分との落差に悩まない若者なんていない。いつか大人になり、理想と現実の自分のギャップを感じなくなったとき、このような店は一護には不要になるのかもしれない。

「……ゆつくりしていきなさい」

オーナーは、大きな掌でマグカップを持ち上げた一護に、そう言っ
て笑いかけた。

古びた椅子の背もたれにゆつたりと身体を持たせかけ、一護は往
来を見るとはなしに眺めた。ベビーカーを引く母親、子供と手をつ
ないで、なにやら笑いながら行く父子。笑いさざめきながら歩いて
ゆく女子高生たち、ゆつくりと杖を突きながら歩き、夕焼けに足を
止めている老人。雑踏が、好きだった。自分とかかわりのない人た
ちの笑い声や話し声の中に身を浸す時に感じる、どこか甘い孤独。
家族が心配しだすことは分かっている。家族の下にもどろうと思う
でも同時に、腰をあげることがもつたいないような。一護は、湯気
をあげるコーヒーに口をつけた。

「いいなあ。その口紅、次の週末貸してよ」

「いいけど。あんたには、まだ早いわよ。高校生なのに」

「いいじゃない、お姉ちゃんだって高校生くらいとき、もうお化

粧してたでしょ？」

二人の若い娘が、仲よさそうに、笑いながら歩いてくる。一護の前を通り過ぎたとき、妹のほうのマフラーの先が、一護の足に触れた。「あ！ ごめんなさい」

屈託のない表情で頭を下げた妹を見て、一護はとつさに頷くことしかできなかった。

―― 似てる。

肩まで届く程度の艶めく黒髪、大人びた口調や態度の癖に、黒目がちな大きな瞳があどけない、一護の良く知る少女。

「あのヒトかつこいい！ そう思わない？」

「でもちよつと、ナイーブっばいよ」

姉妹の会話に、我に返る。クスクス笑いながら去ってゆく背中に、一護は困ったように眉間にシワを寄せた。実際には、機嫌が悪くなつたようにしか見えなかつたが。

コーヒーを見下ろしながら、思う。今更何を考えることがあるのか、と。

―― 「じゃあな、ルキア」

そう言つた時、実にサッパリとした気持ちだつた。悔いなんてなかつたと断言できる。それならどうして、こんな気持ちになるのだろう？ あれから、死神と顔を合わせたことは一度もなく、一護は普通の高校生としての生活に戻された。無我夢中で死神と命のやり取りをしたのに比べれば、なんという平和だろうと思う。決して楽しいなんていえなかつたのに、全てが零に帰してしまつと、胸にぽっかりと穴があいた気分になつた。

「…… なーんか、つまんねーな」

そう、ひとりごちた時だつた。一護の視線が、ふとコーヒーからそらされ、ゆつくりと坂を上ってくる人物に向けられた。

初めは、老人かと思つた。無理もない、ぱつと目に入つた髪の色

が、銀髪だったからだ。しかし、すぐに自分の先入観が間違っていることに気づいた。それは、まだ小学生低学年くらいの体格の少年だった。膝上まである茶色のダッフルコートに身を包み、銀髪の上にぼんと黒っぽいキヤスケットをかぶっていた。その隙間から覗いた銀髪は、夕陽に照らされてオレンジ色に見えた。その翡翠色の瞳に気づいたとき、一護は思わずコーヒートを噴出しそうになった。

—— アイツは！ 死神！？

こんな独特な外見を、見間違えるなんてことはない。無心な表情で眼下の町並みに目をやっている彼は、こちらには気づいていない。いつもの黒い着物、白い羽織姿に比べるとあまりに全てが違っているから目を疑ったが、間近に迫ったその姿は、やはり。

「と……冬獅郎？」

名を呼ばれた少年が、弾かれたように町並みから視線をそらせ、一護のほうを見た。目が合うと、さすがに向こうも意外だったのか、大きな目が見開かれる。あまりにも澄んで蒼いその色に、一護はとっさに言葉を失った。

「……そうか。お前はここに住んでいるのか」

いち早く納得して頷いた少年は、笑顔を見せるでもなく、無表情のまま一護を見返した。できのいいガラス玉のように意志を通さぬその翡翠に、一護はどう返すべきか、戸惑う。

日番谷冬獅郎。たった一ヶ月前に出会った死神の一人。こんな子供のような外見だが、護廷十三隊十番隊隊長を務める重鎮である。ルキアを助けるため瀨霊廷に攻め込んだ時、この少年も敵だったはずだが、不思議と敵という気持ちで見たことはなかった。一度も刃をかわさなかったどころか、ルキアの処刑を止めるため独自に動いてくれたと後で聞いたからだろうか。

「傷は、いいのか」

言葉を探した一護は、ふと思い出して日番谷に問うた。藍染に斬られ、瀕死の重傷を負ったと聞いていた。

「いつの話だよ、もうとっくに治ってる。それに、お前だって重傷

だつたら」

確かに。肩をすくめた一護に、日番谷は若干さつきよりは興味のあ
る視線を寄越した。

「お前は、何やってんだ？この寒いのに」

「何、ていうと……」

一護は口ごもる。物思いにふけっている、なんて何となく言いたく
なかった。「何もしていない」としか言えない。

「なんだ？ それ」

返事は特に期待していなかったのか、日番谷は視線をそらすと、一
護が手にしているマグカップの中身を覗き込んだ。その、濃い茶色
い液体を見て、眉を顰める。

「……泥水？」

「な、わけねーだろ！」

確かに、瀟靈廷でコーヒーを見たことはなかったが、泥とは心外だ。
そういえばルキアがカレーを見て「泥がかかっている」と言ってい
たことを思い出す。

「すわれよ、冬獅郎」

「日番谷隊長と呼べ」

途端に不快げになった日番谷に、自分の向かいの空いた椅子を指差
した。

「コーヒーおごつてやる」

「いらねーって。そんな泥水」

「いいから！」

強引に肩を押して座らせると、日番谷が不満を言う前にドアを開け、
店内に入った。

「おまちどーさん」

その声と共に差し出されたコーヒーの表面を、日番谷は真剣な表情
で見下ろしている。

「いや、そんな毒じゃねーから」

一護がコーヒーを飲むのを見て、日番谷も無言で、マグカップを同じように口に運んだ。途端……

「あちっ！」

ちよつと舌を出したまま、弾かれたようにコーヒーから顔を離す。

口元に手をやったその表情が、びっくりするほどに幼く。

「おい！ そんな笑うな！」

日番谷の顔が赤くなっているのは、きっと夕陽のせいじゃないだろう。

「いや、猫舌つて知ってたなら注意したんだけどな。熱いの苦手か？」

「熱いもんは何でも苦手だ」

「そーかそーか、悪かったな」

確か、日番谷は冰雪系の力の持ち主だと聞いていたから、熱いものが苦手でも、そうおかしくはないと思う。

「……お前、俺をガキ扱いしてねーか？」

「してねーよ、別に。お前俺よりずっと長生きなんだろう？」

「ずっとつて程でもねーけどな」

そう返して、コーヒーに息を吹きかけている日番谷を、一護は見返した。その外見から生きてきた年月を図ることは不可能だ。

「おめー見ると、妹を思い出すつてのはあるな」

「は？」

「背丈が似たようなもんなんだ」

それは日番谷の気に入る返答ではなかったらしい。日番谷は押し黙ったままコーヒーをちびちびと口に運んだが、向き合っていてさっきのような気まずさは感じなかった。ややおいて、口を開いたのは日番谷のほうだった。

「じゃ、こんなとこで何、油を売ってんだ。家族が待つてるんだろ？」

「……あー」

ぼやけた返事を返した一護を、日番谷がチラリと見た。何を聞くわ

けではないが、その瞳が何らかの答えを促しているような気がして、一護は言葉を継いだ。

「……ルキアは、元気か？」

「は？ 何だ急に」

いきなり話題を変えた一護に眉を顰めながらも、日番谷は律儀に頷いた。

「以前通りだ。先週から十三番隊にも復帰してるらしい」

「この空座町の担当になることは、もうねえのか？」

「車谷がいるからな。それは無い」

日番谷の応えはこれ以上ないほど、簡潔だ。

「そっか」

口元に微笑を浮かべた一護を、日番谷は見返した。

「会いたいのか？ 朽木に」

ぐ、と一護は言葉に詰まった。

—— 簡潔すぎるぜ……

この齒に衣着せぬ言い方は、やっぱり子供に近い感性だと一護は思う。

「んー。会いたっていうか」

一護は、残ったコーヒーをぐっと飲み干した。

「たまに思っんだ。あのまま瀨霊廷に残って、死神になったらどうなってたんだろうって」

「どこかの隊に即配属。経験を積みば隊長になるだろうな、お前なら」

日番谷の応えは、よどみない。

「隊長のお前にそれ言われると、なんかウレシーな」

「お前の実力は、誰もが認めてる。才能があると思うぜ、噂を聞いただけでも」

淡々とした言い方だが、逆に妙な気遣いやおべっかでないことが分かる。一護は、それを聞いたとき、少しだけやるせないような顔をした。

「確かに。こっちにいるときよりもよっぽど、瀟霊廷にいるときのほうが自然だったんだ。人間より、死神でいるときのほうが生きてる感じもするし。瀟霊廷から現世に戻ったら、もう瀟霊廷には行けねーかも知れねー。だからちよっと、悩みもしたんだ。戻るかどうか」

その思いは、現世に戻って弱まるどころか、むしろ強まっていた。とんでもないことを考えると、自分でも思う。一護はやっぱり、死神であるよりもいい兄でいたかつたし、息子でもいたかつた。友人も大切だし、それに変わるものなどないはずだった。そうでなければいけないと思っている。それでも毎晩、瀟霊廷の夢を見る。戻りたくてたまらなくなる。……そんなとき、一護はひとり、家を離れるのだ。家族の顔を見ると、違和感を感じるのが怖くて。

「……ンなことより。お前こそ、なんでここにいるんだ？」

これ以上深い考えに落ちる前に、一護はまだコーヒーと格闘している日番谷を見返した。

「……ああ」

日番谷は初めて、歯切れ悪い返事を返した。しばらくあさつての方向に視線を泳がせていたが、

「何だよ？」

身を持ち出してきた一護に観念したかのように、コートのポケットに手をつ込んだ。そして、小さな瓶を取り出すと、一護にそれを突き出してきた。

「なんだ、コレ？ アロマオイル？」

それは、コーヒーも知らない日番谷にしては、あまりに意外な所持品だった。人差し指くらいの高さの小瓶には、ピンク色のパッケージが取り付けられ、中には透明のオイルが１ミリくらいだけ残っていた。

「桃の香り……」

よく売っている「ピーチの香り」よりかは、和風で落ち着いた香りだ。どこをどう見ても、現世で手に入れたものだろう。和風なもの

しか置いてない瀟靈廷でこういうものがあるとしたら、お香くらいのものだろうか。「？」を並べた一護の表情に、日番谷はしぶしぶ、といった口調で説明した。

「お前も知ってるだろ。藍染にやられて寝たきりになってる、五番隊の副隊長がいるって」

「ああ。それは聞いたけど」

「俺の幼馴染なんだ。死神になる前は、一緒に暮らしてた」

「そう……なのか」

家族、みたいなものなのだろう。日番谷の表情が、その時影が差して見えた。幼馴染であり、家族だった少女が、重傷を負ったまま、目を覚まさない。それがどれほどのことなのか、一護には想像すらつかなかった。だから、黙って相槌を打った。下手に同情しようものなら、逆に失礼にさえ思えたから。

「ソイツが気に入ってた香りが、コレなんだ。だから」

「俺、これどこで売ってるか分かるぜ」

「ホントか？」

日番谷が、初めてちよつと大きな声を出した。通り過ぎる人たちの視線が寄せられ、日番谷はちよつと肩を縮める。日番谷の言葉を途中で遮ったのは、わざとだった。あまりにも、言葉に感情がこもっていたから。「枕元に置いたら、目覚めるかと思って」そんなひとことを、言わせたくないかった。一護は、一瞬胸を突いた痛みをこまかすように饒舌になる。

「割と人気商品だからな、何度か見たことがあるんだ」

「そうか……頼む」

残りのコーヒーをぐいと飲み干し、立ち上がった日番谷を見て、一護は苦笑する。少しでも早く、買ってもって行つてやるつもりなんだろう。病床の幼馴染のために、コーヒーすら知らないような異界の少年が、アロマオイルを探しに当ても無く現世に来るなんて。マガカップを二人分カウンターに戻しながら、一護はひとり、微笑んだ。同時に、どうして自分が誰にも言わなかった迷いを、日番谷に

打ち明けたのかも分かった気がした。

クリスマスイルミネーションがとまり始めた街を、一護と日番谷はすり抜けるように歩いてゆく。通りには人があふれ、車道の両側の並木には青白い電飾が飾りつけられている。一護は歩きながら、何度も足を緩めなければいけなかった。日番谷には全てがもの珍しいらしく、しょっちゅうあちこちで足を止めて何かに見入っていたからだ。

「おい黒崎、なんで木に灯りがついてんだ？」

「なんでこんな人が多いんだ？ みんなドコに住んでんだ？」

「なんで犬が服を着てんだ？」

律儀に質問に返しつつ、やっぱり子供だ、と一護は日番谷を見返した。その反応は、街に慣れた妹たちよりもよっぽど子供らしい。何年も昔、ことあるごとに質問してきた妹たちを思い出す。日番谷の表情は変わらないが、その眼がいきいきと、楽しそうに輝いているのを見て、一護はそう思った。さりげなく人ごみから庇ってやらないと、さつさと歩くほかの人々にぶつかってしまいそうだった。

「ホラ、この店だぞ」

「……どうやって入るんだ」

「自動ドアをしらねーのかよ……」

どうやって開いたんだ、と自動ドアに釘付けになっている日番谷の腕をひっぱり、一護は店内に足を踏み入れた。この調子じゃ、いつまでたっても目指すものにたどり着きやしない。

「あつた」

「桃以外にもいろいろあるぜ。梅とか、桜とか」

「桃でいい」

日番谷は迷い無くそう言うと、棚上の「桃」のアロマオイルをいくつか手に取った。その時の、どこか寂しそうな日番谷の横顔に微笑が浮かんだのを、ちらりと一護は見てしまった。とたん、ぎゅっ

と胸が痛んだ気がした。眠り続ける幼馴染の枕元にこれを置き、その香りに包まれながら、彼女の寝顔を見下ろす日番谷。その風景が、瞼に迫るように思えたから。一日でもはやく、幼馴染の少女が目覚めてくれればいい。一護は、祈るような気持ちでそう思った。

「なっ、なんだよ」

いきなり、キャスケットの上からぐしゃぐしゃと頭を撫でてきた一護を、日番谷は睨み上げた。ずれた帽子を直しつつ見上げると、一護は隣の棚から、マフラーを選んでいた。

「んー、やっぱり深い緑か蒼が似合うよな、お前」

日番谷の前に緑と蒼のマフラーを吊り下げるように置き、日番谷と見比べる。

「は？ マフラーなんて買いに来たんじゃ……」

「俺が買っただよ。それより緑か蒼、どっちがいい？」

「俺は……」

「俺・が・買・う・ん・だ」

しつこく言ってやると、日番谷はしばらく押し黙った。

「……蒼」

「その心は？」

「緑は仕事を思い出して、嫌だ」

当然一護は、日番谷の隊首羽織の裏地の色を思い出さずにはいられなかった。顔を見合わせて、思わず笑う。

「金はこれだけしかないんだが、足りるか」そう言って一万円札をバラバラ取り出した日番谷に、店員が眼を丸くしたり。一護が慌ててそれをフォローしたり、というようなことはあったが、5分後には二人とも、また路上のひとになっていた。ただ、日番谷は片手に小さな袋をぶらさげ、その首には温かそうな蒼いマフラーを巻いていた。日番谷は、街歩きがよほど気に入ったのか、一護の先をぶらぶらと歩いている。どこへ向かっているのか当てはないのだろう

が、一護は黙ってその後について歩いていった。

—— ホント、弟ができたみたいだな……

ふとそう思った時、家族への後ろめたさがすっかり消えている自分に気がつく。今顔を合わせても、もう辛い気持ちにはならなくていい。そんな気がした。

「礼をしなきゃな。お前のおかげで、随分早く目当てのものが見つかった」

「いらねーよ、別に」

しかし、日番谷ひとりでコレを探していたら、一体いつ見つかるのだという感じではあったが。

「そついうな。眼には眼を、歯には歯を、だ」

「……それ、ちよつと使い方違うぞ」

「黒崎。ちよつと考えれば分かることだと思うが」

不意に日番谷は、くるりと振り返って一護をじつと見つめてきた。

「家族とずつと変わらず暮らせるなんてことは絶対にねえぞ」

その言葉は……まるで何かに頭をぶん殴られたかのように、一護の頭に響いた。いつ目覚めるかもしれぬ「家族」を待つ日番谷に対し、自分が打ち明けた悩みの無神経さが、分かったから。

「わ、悪い……」

俯いてしまった一護に、日番谷は歩み寄る。その口元が微笑んでいるのを、一護は目の端に捉えた。ぽん、と二の腕の辺りを叩かれる。「後ろ。お前の家族だろ。霊圧が似てる」

「へ？」

慌てて振り向くと、通りの向こうに身間違えようも無い、一心と夏梨と遊子の姿が見えた。買い物をしていた帰りなのだろう。3人もビニール袋を手にかけていた。遊子が笑い、夏梨が怒ったような表情で一心を見上げ、一心はおどけたような表情をしている。その会話の中身が聞き取れるようで、一護が顔をほころばせたとき、一心が振り向いた。

「おー、このバカ息子が！ どこほつつき歩いてんだ、帰るぞ！」

「あー、お兄ちゃん!!」

遊子がぴょん、と大きく跳ねて、一護を見て顔一杯で笑った。

「おー。今そっち行く!」

手を振ってそう応えて、一護はふと気づいた。「霊圧が似てる」と日番谷は言った。だとすればきつと日番谷は、めくらめつぽうに歩いてたわけではなく、家族のほうへ一護を導いていたに違いないのだ。そこまで考えた一護は、ひとこと付け加える。

「あ、それと、コイツも家に連れていくから!」

しかし、その言葉に、通りの3人は眉を顰めた。

「コイツって? 誰」

「へ? コイツだよ」

振り返るなり、一護はぴたり、と動きを止めた。慌てて周囲を見渡すが、そこにはただ、行きかう人々がいるだけ。あの銀髪は、もうどこにも見えなかった。

「一兄! 早く!」

「あ、ああ」

夏梨の声に、一護はなおも辺りを見回しながら、諦めて横断歩道を渡った。

「ちくしょ。礼も言えなかったじゃねーかよ」

そう、ひとりごとを言いながら。

通りの向こうで、3つの背中に、ひとつが加わる。すぐに栗色の髪の少女がその手を取り、すかさず父親らしい黒髪の男が、荷物のひとつを持たせるのが見えた。ブツブツ言っているのだろう、でも一護は一番重い袋を取り、3人の中に混じって歩き出す。

「……」

日番谷は、それを向かいの百貨店の屋上に立ち、見下ろしていた。その口元は、あるかなしきの笑みに彩られている。ヒュウツ、と吹き抜けた木枯らしに、首をすくめた。そして、一護に贈られたマフ

ラーを巻きなおし、去りゆく4人に背を向けた。

「……どうか、できるだけ長く、そのままで」

永遠にそのままはありえない。少しずつ家族は変わってゆきバラバラになり、いつかは完全に絶たれる。その運命からは百パーセント逃れられぬ。だから運命の受け手たる自分達にできるのは、祈ることだけなのだ。この何気ない幸せが、一日でも長く続きますように、と。

風邪にご注意

「ホントーに、隊長ったら……」

ドンドンと足を踏み鳴らして廊下を歩いているのは、松本乱菊。蜂蜜色の髪と蒼い瞳が猫を連想させる、瀟々たるお色気担当と名高い死神である。

「自分をもうちよつと客観的に見るべきよ」

ぶつぶつ文句を言う相手は、切れ者と名高い彼女の上司。

おおっぴらに垂れ流すその文句を、周りの死神たちは触らぬ神にたたりなし、と見送った。

普段なら、上司である日番谷が乱菊に文句を言うことはあっても、その逆はまずない。

よほどのことがあったんだ……と、彼女が通り過ぎた後に囁きあった。

コトの発端は、わずか三十分前。

その頃は、日番谷はいつもどおり無表情で机に向かい、乱菊はソファでごろごろしていた。

「回覧です」

ノックと共に、ぴょん、と乱菊が起き上がる。

仕事しようというよりは、退屈しのぎになにか来たか、とでも言わんばかりに目を輝かせ、扉を開けた。

「んー。今年の風邪、タチ悪いみたいですねー」

「死神が風邪で死んだら笑い者だな」

回覧の紙を流し読みしながら歩いてきた乱菊を、日番谷はチラリと見上げた。

「あー」

途端に大声を出した乱菊を、胡散臭そうに見やる。

「なんだよ」

「大変！ 子供とお年寄りでは重症化しやすいから、初期に効く薬を配ってるんですって！ 行かなきゃ！」

「なんで」

日番谷は、回覧をにおいて部屋を出ようとする乱菊の背中に声をかけた。

「なんでって、隊長子供でしょ？」

「俺は子供じゃねー！！！」

したがって、三十分後の乱菊の不機嫌があるわけだ。

「まったく、身長133センチで子供じゃないってことがあるかしら？ だしたら小人だったの」

本人が聞いたら噴火しそうな言葉を口にしつつ、乱菊は十番隊の執務室の扉を押し開いた。

「隊長。例のブツ、引き上げてきました」

「そーかそーか。ゴミ箱に捨てとけ」

「ヒドイっス、隊長」

そう言いながら、目立たない棚の上に、子供用の風邪薬を置く。

「まったくよ。どこのバカが、こんな真つ先に風邪引くかよ」

悪態を垂れながら、日番谷は首をぐるりと回して立ち上がった。

そして、ぐるりと机を回って部屋を出ようとして……ゴミ箱に蹴つまづいた。

「ちょ、ちよつと隊長ったら」

日番谷らしからぬ失態である。ゴミ箱を受け止めた乱菊が、しゃがみこんで日番谷を見上げた時……

「きゃー！」

思わず、叫んだ。ぐらりと体勢をくずした日番谷が、そのまま乱菊の頭の上に倒れこんだからだ。

「ま、まさか……」

受け止めたその体は、驚くほどに熱い。その額に手を当てて、乱菊は思わずおろおろとあたりを見回した。

「ほんとに、もう……」

日番谷の自室で、乱菊がバタバタと歩き回っていた。

乱菊の処置は普段のぐうたら振りがサギに思えるほどに素早かった。自室に日番谷を運び、布団を引いて、寝かせるまでほぼ10分。

「どーってことねえ……うっ」

「はい、黙っててくださいねー」

文句を言おうとした日番谷の口の中に、乱菊が体温計の先を突っ込んだ。

「ー　　なんかコイツ、嬉しそうじゃねえか？

体温計を銜えたままそう思ったのは、日番谷のひがみ目からではあるまい。

何しろ、乱菊は鼻歌を歌っているのだから。

玉子酒にしようかな、おかゆにしようかな、と独り言を言う彼女は、そうとう楽しそうだ。

頭の中には片付けなければいけない書類が回っている。

寝てる場合じゃない、と上半身を起すと、くらりとした。

途端に乱菊が飛んでくる。そして無言で、日番谷の口から体温計を引き抜く。

「38度」

「……」

寝ろ、と布団を無言で指差す視線が、非常に怖い。日番谷は早々に諦め、布団の中に退散した。

「……なんでそんなに嬉しそうなんだよ、松本」

「そう見えます?」

不服そうな日番谷に、乱菊は笑って見せた。

手にした玉子酒をふうふうと吹いている。

「なにやっても隊長って、あたしより優秀じゃないですか」

「そりゃ、隊長だからな」

「だから、たまにね。こうやって寝込まれたほうが、お役に立てる感じがしていいんですよ」

そう言って、少し覚ました玉子酒を日番谷に持たせて、乱菊は笑った。

それならいつも、もっと働け。そういおうとしたのを飲み込ませるほどに、優しい笑顔だった。

玉子酒は、寒気を覚えていた体にはちょうど良かった。

とろんとした睡魔が押し寄せてきて、日番谷はうとうとと眠っていた。

カチャカチャと音を立て、食器を洗う音が聞こえてくる。

何だか夢を見ているような、昔こんなことがよくあったような、そんなまどろみの中で、日番谷は呟いた。

「食器割んなよ……雛森」

「……」

ずっと続いていた鼻歌が、途絶えた。食器を置く音がして、乱菊が部屋の中に顔を覗かせる。

そつと見やると、日番谷はスースー寝息を立てていた。

「……やっぱり雛森、なんですね。隊長にとっては」

そのあどけない寝顔は、雛森が近くにいてくれると思っていたからだろうか。

少なくとも自分には、こんな表情を見せてくれることはないから。こんなふうに寝入られたら、呼び間違いを怒ることもできないじゃないか。

乱菊は、ふつと微笑んだ。

「……オシオキです」

そう言って、熱のせいで赤らんでいるその頬に、ポツリと口付けた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6625d/>

Acoustic Bleach

2010年10月9日00時28分発行